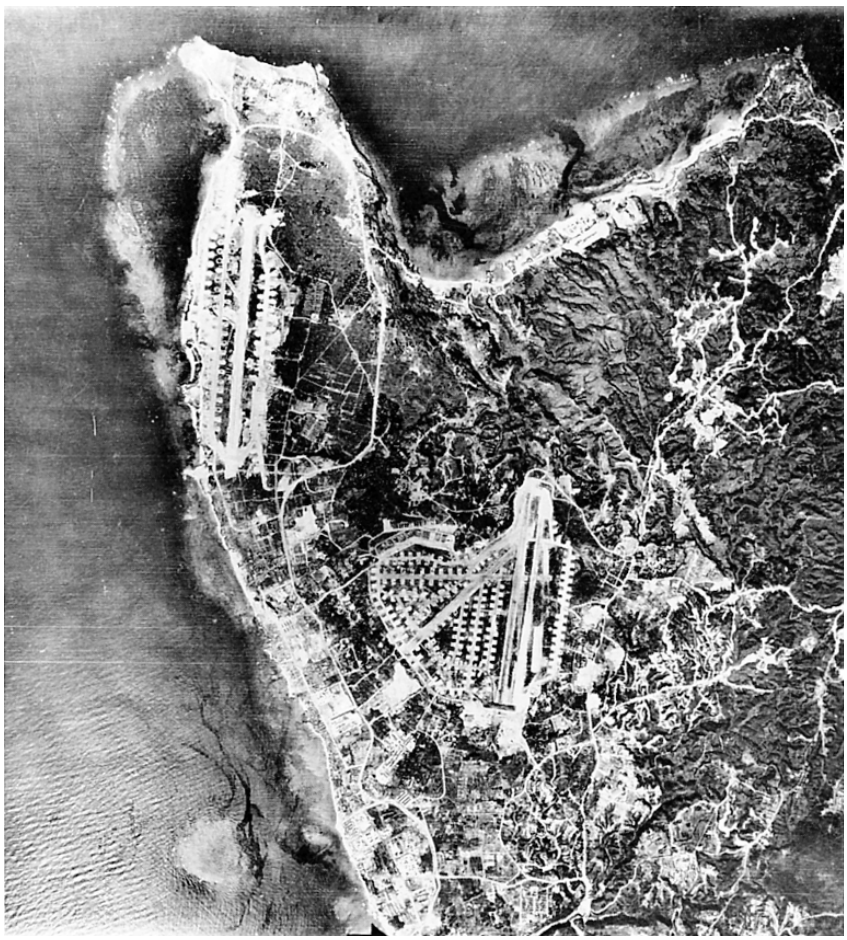
平和の炎 Vol.6

第６回読谷村平和創造展

―― 平和郷はみんなの手で ――

＝ 第２回環境自治体会議・読谷村集会の記録 ＝



米軍上陸8ヶ月後の読谷村（米軍撮影）
上陸前の猛烈な艦砲射撃や空漠、そして上陸後の空軍基地の構築や軍事物資の陸揚げ等で幾世代にも続いた畑や家並、緑の景観などの素晴らしい環境は無惨にも破壊し尽くされた。（1945.12.10　空撮）

読　谷　村

発刊にあたって

「平和に勝る福祉はない」

読谷村長　山　内　徳　信

1989年に冷戦の終結が宣言されて３年余、米ロ両国の核の臨戦態勢解除が進むとともに、東側の軍事同盟であったワルシャワ条約機構は解体し、米軍も大幅な軍備の削減過程に入るなかで、沖縄の基地だけが何等変わることなく、県民の声を無視し演習やそれに伴う環境破壊が続いている。

去る11月９日（火）午前、米軍は読谷補助飛行場でのパラシュート降下演習を実施、その中の一人が目標地点を大きくはずれ規制区域外の通勤通学路上に落下する事故を起こした。

当日も県内の保育園児がいも掘り遠足のためバス４～５台を連ねて通過したところであり、また役場公用車が公務通行中、降下してくるパラシュートに危険を感じ急ブレーキをかけ難を逃れた。このように一歩誤れば重大事故につながるものでありながら、米海兵隊報道部は抗議団がパラシュートをつかみ、道路の方には引きずって行った等の見解を表明し事故ではないと強弁した。さらに在沖米海浜隊司令官は、「米軍はこの地域（アジア太平洋）の安定に貢献し、日本国民の未曾有な繁栄を可能にしている」「日米合同委員会を通し、日本政府に正式に抗議するよう勧告するつもりだ」等と述べた。しかしながら、事故現場にいあわせた報道カメラマンの写真によって、米軍側の主張こそが事実誤認であることが確認されたのである。

同じ頃、嘉手納基地・第18航空団司令官は「嘉手納基地の爆音は自由の音」などと発言し、毎日爆音被害に悩まされている嘉手納基地周辺住民の反発をかった。

こうした発言は何を意味するのだろうか。

沖縄は、人口からいっても日本全土の１％に満たず、面積でも全国の0.6％しかない、こうした沖縄に在日米軍専用基地の75％が集中している。沖縄県民は、日米安保条約を否定する人はもちろん、肯定する人々も、もし日米安保条約の役割がそれほど重要であるとするなら、日本全国の皆さんが平等にその責任を分担すべきではないのか、沖縄だけに過重に負担せしめるというのは不公平ではないか。これは日米両国政府の沖縄の人々に対する人権無視、差別ではないのかと大きな憤りを感じない訳にはいかないのである。

また、米軍はアジアの現状認識の中で、北朝鮮の核疑惑を挙げながら、北の脅威を理由に沖縄での米軍基地の存続の根拠を説いているが、こうした考え方は民衆の意識とは遠くかけ離れたものであると同時に、軍縮の世界的潮流に逆行するものであるといわざるを得ない。核兵器は相互に同時に全世界からなくし、真の意味での平和な社会を構築して行かなければならないことは自明のことである。

地球的な視野に立ったとき、全世界的な課題はもはや軍備の増強や核兵器による均衡論ではなく、病んだ地球を救い、環境破壊をやめ、人々が平和の中で豊かに生活する方策を確立する

ことである。

今年５月、私の訪米中（読谷飛行場問題解決の要請のため）に第２回目の全国環境自治体会議が本村で開催された。本書はその全記録である。この中には、地球環境の現状に危惧の念を抱き、私たちの住む宇宙船地球号の将来を明るいものにするために、私たち地方自治体やそこに住む人々は何をすることが出来るのだろうか、などいろんな角度からの提言や実践論があり多くの示唆に富む内容になっている。これもひとえにご参加いただいた皆様方の熱意と真摯な姿勢の成果であり、全ての方々に感謝の意を表したい。

平和であってはじめて、環境を論じ、反戦平和を論じ、人生や政治を論じ、未来を論じることができる。私たちはこれからもいろいろな試行錯誤を繰り返しながらも、私たちの次の世代のために足元から、環境の問題に対処するとともに、平和な社会の実現に努めて行かなければならないことを確認した。

平和運動のあり方を、環境論の立場からも深めていくことが出来ればと願い環境自治体会議の内容を含めて発刊することにした。本書が、今後の平和運動と環境自治体運動の一助になれば幸いである。

1993年12月８日

目　　次

発刊にあたって

開会集会 …… 1

基調講演－「市町村行政と環境問題」 …… 7

問題提起 …… 23

交流会スナップ集 …… 35

第一分科会－「南北問題と環境保護」 …… 37

第二分科会－「ローカルアジェンダ21」 …… 81

「環境と平和」写真集 …… 127

第三分科会－「環境と平和」 …… 139

読谷ウォッチング・歓迎会スナップ集 …… 177

閉会集会 …… 183

資料 …… 195

あとがき …… 211

開 会 集 会

司会（先崎千尋）

読谷村での第２回自治体会議に御参加をいただきまして、大変ありがとうございます。これから３日間にわたりまして、環境自治体会議を開きますけれども、今日は全体集会で、その司会進行を仰せつかりました茨城県瓜連町長の先崎でございます。よろしくお願いいたします。

それでは最初に開会宣言を、この環境自治体会議の仕掛け人の一人でもございますＵＲネット代表の丸谷金保さんにお願いをいたします。開会宣言ですと10秒で終わりますので、会の趣旨等も含めまして、御挨拶をいただきたいと思います。

開会集会、閉会集会の司会をしていただいた先崎千尋氏・茨城県瓜連町長

丸谷金保

今日の午前中、村内の視察を致しましたところ、大雨に会いましてズブ濡れになってしまいました。しかし濡れながらもああ良かったと思いました。これで沖縄の水不足が解消すると思ったわけです。自治体の発想というのはそういうものなんです。自分がズブ濡れになりながらも全体のことをすぐ考えます。ですから今日の環境会議もその点、自治体の皆さん方がたくさん集まって、自分のことより全体をトータルとして考えるところから出発していただければ、この大雨、やっぱり良かったなということになると思います。

まず最初にお詫びしなければならないのは、仕掛け人の一人であります読谷村長の山内さんが、現在ワシントンに行っております。山内さんの日程に合わせてこの大会の開催日を決めたのですが、つい二週間前アメリカ側の都合もあり、急遽大田知事と共にワシントンに出かけることになりました。村の半分ぐらいがまだ米軍基地である読谷の実情を訴え、基地返還の要請を行うことが決まり、なんとしてもいかなければならなくなりました。

丸谷金保氏・ＵＲネット代表
（元北海道池田町長、元参議院議員）

こういう事は、いわゆる「余人をもって代え難し」首長というのはそういうことがあるんです。この際のワシントン行きがこれに当たります。あとで助役さんから山内村長のメッセージを読んでいただきますが、万やむを得ないところでございますので、ご了解をお願いしたいと思います。それにしても沖縄の戦後はまだ終わっていない。急遽アメリカに発った山内さんの心境を、しみじみ噛みしめておる次第であります。

ところで、今回のテーマは「地球・南北・環境」ということであります。アメリカの元宇宙飛行士がこう言っております。「宇宙から地球を見たとき、だれでも大気層のひ弱さにショックを受ける。環境とエコロジーへの配慮なしには人間が生きていけないということがよく分かった」と、まさにいま、私たちは地球危機の中に

あることをお互い確認したいと思います。そして地球危機の中で1972年にストックホルムで国連が、初めて国際環境会議を行い、昨年リオでＯＥＣＤの環境国際会議までの20年間、最初は主として化石燃料の70パーセント、ガソリンの90パーセントというように、都市型消費たれ流しによる、四日市喘息のような公害が問題でしたが、そのうちにアマゾン開発の問題とか、熱帯雨林の問題など、南に軸足が移って参りました。

いまや環境問題も南と北との相互理解の上に成り立たなければいけないということになってきました。南北問題をテーマとして取り上げた所以です。そしてこの問題は地球規模のことばかりでなく、日本国内でも過密に悩む都市自治体、過疎に悩む農山村の自治体がまったく別な角度で、あるいは逆の立場で取り組まなければならないというふうな違いを見せてきております。

今回はそのような問題でも皆様とゆっくり勉強させていただきたいと思っております。そして呼びかけの中でも訴えておりますように、水の問題、ゴミ処理の問題そのほか環境保全に一番努力している地方自治体が、トータルとして努力しながら、一部エキセントリックな（常軌を逸した）自然保護運動家に被告席に立たされることがあまりにも多いということです。

そして多くの自治体の中には環境問題に熱心なところと、それほどでないところもありますが、今日はとくに、全国でもその地域で環境問題と真剣に取り組んでいる首長さんたちと、市民運動を通じて環境問題に熱心に取り組んでいる方々が一堂に会して、それぞれの立場で本音の話をしてもらう。そこからでなければ環境問題の前進は有り得ないと、テーマの３にとくに「環境」を取り上げた所以でもあります。二者択一的論議ではもう解決できない。南北問題にしても地域の問題にしてもそうです。例えば東京でもみの木が排気ガスで枯れてるということが起こっております。だけどもみの木が枯れたことだけがけしからんと文句を言っても問題は解決しません。

今回はそういう事をひとつテーマにしながら、現場からの実りあるご提言をいただき、会を進めてくださるようお願いして、ここに第２回環境自治体会議の開会を宣言いたします。

司会

ありがとうございました。続きまして地元読谷村から歓迎の御挨拶をいただきたいと思います。読谷村の安田助役お願いいたします。

安田慶造

ハイサイ、グスーヨーチューウガナビラ（皆さん　こんにちは）。この読谷山マディ北や北海道から大概十三、四市町村ヌ首長サヌン迎えながら、この読谷の地で第２回目の環境会議を開催できますことを、皆さんとともにお慶び申し上げます。イッペーニヘーデービル（大変ありがとうございます）。村長がワシントンの方に行っておりますので、代わって私から歓迎の挨拶を申し上げます。

第２回環境自治体会議がここ沖縄県読谷村で開催されますことを喜び、全国各地から参加くださいました皆さま方を心から歓迎申し上げます。実行委員会事務局を仰せつかりました読谷村としましては、微力ではありましたが共催、後援、協賛の各団体をはじめ、各分科会の司会者、提言者、パネラー及び出席者の皆様方の御指導と御協力をいただき、本集会を開催することができ心から感謝を申し上げる次第でございます。また本日の基調講演の講師には、コザ保健所所長・医学博士、吉田朝啓先生に「市町村行政と環境問題」というテーマでお話をいただくことになっています。先生にはたいへんお忙しい中ではありましたが、御協力を賜り厚く感

謝を申し上げます。ここ沖縄本島の中南部地域は、去る大戦で鉄の暴風と称されるほどの、大量の砲弾・爆弾を打ち込まれ、一草一木をとどめぬ焦土と化し、一切の文化文物を失い、20万余の人命が失われました。読谷村の西海岸は沖縄戦の米軍上陸地点であります。復帰後、読谷村政の目標に「人間性豊かな環境・文化村」づくりを掲げたのも、その所以であります。

安田慶造氏・読谷村助役

さて、地域環境の危機が叫ばれ、人々はかけがえのない地球を意識し、その保全と改善に本格的に取り組まなければならないことを痛感しはじめました。昨年の地球サミットも、そのことの表れでありました。リオ宣言やアジェンダ21の採択など、具体的な行動をすぐに起こさなければ病んだ宇宙船地球号を救えないとの認識が全ての人々の声となり、世界を駆けめぐっております。地球という空間の中で私たち人類は地球環境から得られる資源を利用し、消費することで人類社会の発展や新たな文明社会を築き上げてまいりました。しかしながら過度の資源消費は地球環境の許容限度を越え、大きな負荷を及ぼしております。今や地球環境の安全性は揺らぎはじめ、その循環性は損なわれてまいりました。地球温暖化の進行、オゾン層の破壊等が如実にそのことを表しております。こうした状況のなかで未来の子ども達のために、私たちは何をしなければいけないのでしょうか。私たちの地球環境の集合体が、地球環境なのだということに思いをいたしたとき、各自治体の責任は重大であると言わなければなりません。自治体こそ身近な地球環境に日常的に接しており、住民とともに環境問題に取り組まなければならない立場にあるのであります。

さらに私はこの会議が沖縄の地で開催されるにあたり、体験を通して戦争と軍事演習こそ環境破壊の最大の要因であることを強調しなければなりません。沖縄戦で尊い人命、貴重な文化遺産、亜熱帯の緑豊かな自然を失いました。それゆえに沖縄の人々の緑の創出と平和創造への思いは切実であります。第三分科会の「環境と平和」というテーマを設定させていただいた理由もそこにあります。とうか各自治体や各地域、各団体で実践している事例等を出し合い、経験交流を通して今後の各自治体における環境行政に寄与することができますよう、参加者各位の積極的な御発言と会運営がスムーズにできますようお願いを申し上げ、歓迎の御挨拶といたします。1993年５月27日第２回環境自治体会議実行委員会委員長　読谷村長　山内徳信。代読助役安田でございました。どうも。

司会

どうもありがとうございました。

この会議にはいろいろな団体等から御後援・御協賛をいただいておりますけれども、本日その中の一つでございます。沖縄県知事から御挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いをいたします。

砂川恵徹

沖縄県環境保健部長をしております砂川と申します。知事が今アメリカへ出張中でありますので、私から知事の挨拶を代読させていただきます。

第２回環境自治体会議が本県で開催されるにあたり、一言ごあいさつ申し上げます。

地球環境は温暖化の進行をはじめ、熱帯雨林

の減少など日々危機的状況を呈しており、環境問題は官民を問わず、主体的かつ日常的に取り組まなければならない重要な課題であります。

「Think Globally, Act Locally」すなわち地球的視野に立ってそれぞれの地域から行動を起こす、という理念の下、各自治体が環境問題に具体的に取り組んでいく必要があります。このことが、大きな流れとなって広く定着する時、世界の環境に少なからず良い影響を与えるものと確信します。

本県は我が国唯一の亜熱帯地域として美しい自然の海岸線や世界に誇る珊瑚礁など豊かな自然に恵まれておりますが、他方、都市河川の汚濁、開発に伴う緑の減少、赤土流出による海域の汚染、更には米軍基地等に起因する騒音等、地域住民の生活環境の改善のため解決しなければならない多くの課題を抱えております。

砂川恵徹氏・沖縄県環境保健部長

県ではこれらの問題解決のため、生活排水対策をはじめ赤土流出防止対策等、諸施設を展開するとともに、去る４月25日に開催した全国植樹祭を通して、緑化思想の普及啓発に努めたところであります。今後とも、貴重な自然環境の保護と県土の保全及び公害の防止のため、全力を傾ける考えであります。

自然は祖先から預かったかけがえのない財産であります。次代を担う子ども達が健やかに成長し、この美しい地球に住めることを願うとき、人類存続の共通基盤であるこの有限な地球の環境を守り、次代へ引き継いでいくことは我々に課された重要な責務であります。

各自治体におかれましては、今後ともそれぞれの地域の特性を活かした環境対策に取り組まれるよう念願してやみません。

終わりに、主催の労をとられました実行委員の皆さまの御労苦に対し敬意を表しますとともに、本日の会議が実り多いものとなることを祈念して、ごあいさつといたします。平成５年５月27日　沖縄県知事　大田昌秀。代読でございました。どうもありがとうございました。

司会

どうもありがとうございました。

続きまして、国際環境自治体会議からメッセージがございますので御紹介を申し上げます。

須田春海

国際環境自治体会議についての説明は、このピンクのパンフレットで見ていただければ分かると思います。本部はトロントにありまして、昨日、事務局長のブルックマンさんからファックスが入って、訳して今日急遽お持ちしました。この中に入っていると思いますが、読まさせていただきます。ＩＣＬＥＩというのは国際環境自治体の略称です。

ブルックマン（須田春海が代読）

ＩＣＬＥＩを代表し、ここに環境自治体会議の支持を表明するとともに、本会議の開催につながったアースデイ日本のビジョンにお祝いの言葉を述べたいと思います。最近の景気後退に伴い環境問題の重要性に対する日本の市民の関心は低くなってきていると聞いています。しかし本会議の開催は別の傾向を示すことでしょう。本会議は日本の環境運動に新しい生命が生まれた証拠であり、全国レベルで創造的に協力しながら、地域で展開される行動を通じて、地域・広域地域、地球環境問題に取り組む地方政府同志の約束です。世界の別の地域で起きた環境自

治体づくりの結果として、1990年に設立された地方政府の国際環境機関の事務局長として私は、本会議と協力して、国際的なプログラムや活動、特に国連のアジェンダ21行動計画の地域実践ができることを喜びたいと思います。

「国際的な持続可能な開発」を実践する主体である地方政府の役割について、皆さんと考えたい点をいくつか述べます。私たちは、今後数十年間で最も重要な課題は、いわゆる「エコロジカルな開発」、エコロジカル・ディベロプメント（Ecological development）であると考えております。エコロジカルな開発というのは、公害や廃棄物が一度問題になってから、浄化活動や管理に取り組むといった伝統的な意味での環境保護を、都市が自然のエコシステム（ecosystem）の効率性、そしてエレガンス、科学的な緻密さと簡潔さを利用しながら、機能するために開発を行うという積極的な努力へ変えることを意味します。このエコロジカルな開発は人類の生存に不可欠な三つの課題を提起しています。

須田春海氏・アースデイ日本事務局代表

第一に、都市そして人類は、自然資源の浪費全体を削減し、世界各地でおこなわれている資源の搾取により起こる自然のエコシステムの崩壊をくい止めなければならないこと。

第二に、都市そして人類は、人間開発、ヒューマン・ディベロプメント（human development）を確保するとともに、前進させていかなければならないこと。ヒューマンニーズと向上心を共に満たしていかなければならないこと。

第三に、都市そして人類は、廃棄物や公害の環境への排出を削減していかなければならないこと。

私は都市が環境問題そのものとして存在し続けるのではなく、この三つの目標を達成することができるような重要なメカニズムとして機能すると信じています。都市は複雑なシステムですが、このシステムにより私たちは人類が存続するための三つの条件を満たす最高の機会を得ることができるのです。この観点から、都市そして地方政府の担うエコロジカルな責務について簡単にまとめたいと思います。

都市は人的資源の開発を促進し、雇用を拡大させることにより、限りある地球の自然資源に対する需要を下げるために私たちがつくり上げる複雑なシステムです。私の同僚であり、ＩＣＬＥＩの活発なメンバーであるヘルシンキ、メトロポリタン・カウンシルの理事ジュハ・シパラ氏はより分かりやすく次のように表現しています。「持続可能な開発とは、我々が限りある自然資源を使う代わりに無限とも言える我々の知恵を使うことである。」大都市での持続可能性に対する私たちの前進の度合いは、一つの簡単な傾向によって測ることができます。この傾向は自然資源を都市へ流入させるための投資に対する、都市自身に内在する資源の開発のために行われる投資の比に表れます。この傾向を正しい方向に向かわせるために、私たちはエコロジカルな開発のための四つの基本目標を目指さなければなりません。

１、資源の効率利用を高め、環境への公害移出を削減するためのシステムへの投資。この投資により地方政府は公害を緩和し、廃棄物を管理するための巨額な投資を減らすことができます。

２、都市形態の主導権を握る。特に公共交通、地域暖房、廃熱発電、廃水リサイクルなどのシステムに収益性を保ちつつ投資するために、都市の人口集中のために得られる好機を活用すること。

３、私たちのコミュニティーが社会問題の対処療法のための投資を減らし、代わりに個々人の工夫、新しい試み、意欲を刺激するための投資を増やすために、地域の人的資源を開発すること。

４、システムづくり。都市統合、人間開発の手法、手段を考案すること。つまり地方政府自体の構造、計画立案メカニズム、政策を改革すること。キーワードは「部門間」「学術間」「行政管轄区域間」「参加型」「地方分権」です。

環境自治体づくりの戦略として注目すべき点に、次のようなことが挙げられます。都市を環境への負荷を与えるものとして捉えず、都市の中に環境問題を解決する機会を見いだすこと。公害・廃棄物管理の投資から資源の効率利用や資源のリサイクルのためのシステムづくりへと漸次移行すること。人類の知恵は新しい試みや資源の効率利用を進めるうえで、最も進んだ自然の創造物であるという認識の下に、人間開発を環境問題の議題の中心におくこと。自治体改革に必要とされる取り組みを直線的に進めること。このような努力によって、環境自治体づくりは人々の生活、そして私たちの母なる星である地球の持続可能性に真の影響を及ぼす動きとなるでしょう。本会議にメッセージを寄せることができ嬉しく思います。皆さんの努力により、本会議が成功することを祈るとともに、皆さんと共に活動できることを楽しみにしています。1993年５月26日国際環境自治体会議ＩＣＬＥＩ事務局長ジェブ・ブルックマン。〔以上です〕

司会

どうもありがとうございました。それではここで祝電が届いておりますので御披露申し上げます。

「現在、最も重要な環境の問題について考える会議が、故郷読谷の地で開催されることを、たいへん誇りに思っております。会の成功を心より祈っております。」沖縄県議会議員、糸数慶子さま。以上でございます。

それでは以上で開会集会を終わりまして、続いて基調講演に移らせていただきますが、準備の都合で若干休憩をさせていただきます。なお準備が整いしだい始まりますので、そのままお待ちください。

１時間30分の予定で、沖縄県環境保健部、医療技監兼コザ保健所長の吉田朝啓先生から「市町村行政と環境問題」というテーマでお話を伺います。吉田先生の略歴につきましてはプログラムの８ページに詳しく載っておりますので、ご覧いただきたいと思います。それでは吉田先生お願いいたします。

基 調 講 演

「市町村行政と環境問題」

講師：吉　田　朝　啓　沖縄県環境保健部
医療技監・コザ保健所所長

はじめに

こんにちは、皆さん。ようこそ沖縄に来てくださいました。沖縄のど真ん中、読谷村へ、全国から来られた皆さん方に県民を代表いたしまして、口幅ったいですが、歓迎の言葉を申し上げたいと思います。ほんとうにようこそ沖縄へ。

私は今紹介いただきましたが、去年の今頃までは県の公害衛生研究所というところで、名前のとおり公害とか衛生の問題を研究する立場の人間でしたが、およそ一年半ほど前、現在のコザ保健所に来ております。ちょうどこの読谷村が、私どもの保健所の管轄内と言いますか、２市２町３村のうちの一つで、そのために全国の皆さんの前で環境問題について話してくれという御指示だったんではないかと思っております。御指示のテーマは「市町村行政と環境問題」ということですが、非常に広い環境の問題ですので、しかも一時間ちょっとの時間いただいておりますので、手際よく環境の問題をお話し申し上げるために、ブルースライドとＯＨＰ、紙芝居のような、いろんな表を持ってまいりました。それを示し申しながら、話をすすめたいと思います。私さきほど申し上げた研究所の生活が非常に長かったものですから、外の、つまり自治体、皆さんがタッチしておられる自治体にとっての環境問題について、あまり詳しく勉強しなかったせいか、ひょっとしたら私の申し上げる話の内容で、立場が県職員としての立場でものを申し上げるようなニュアンスがあるかもしれませんが、その辺はひとつ修正方よろしくお願いしたいと思います。それから、今日うかがいまして初めて遭遇した概念、言葉に環境自治体という言葉がありますね、概念が。これも私初めて拝見しまして、いったいこれなんぞやと思いましたが、幸いここにハンドブックがありまして、その冒頭にこれは何かというふうなことが書いてあります。それを拝見しますと、皆さん、もうよく存じでしょうけれども、自治体の全ての領域に環境主義を取り入れるという言葉があります。ははぁこれなんだあと思って、ややホッとした気持ちで壇上に上がったところでございますが、もう一つは自治体の政策、特に町づくりに環境政策を浸透させることと書いてあります。これなら県の立場であって、一昨年まで頑張ってきた我々の目標と、その分野はまったく同じだなという気持がします。で、申し上げますが、これから環境について話しますが、環境とはいったい何かということから、私なりの話をしたいと思います。

１、環境とは

環境というのは一人の人間が、個人であります。個人の中は、私医者ですが、医学的に見ても、この非常に微妙で絶妙にできあがった有機体ですね。体そのもの。これ小さい宇宙と言います。小宇宙と言います。心臓があって肺臓があってよく動いていてよくコントロールされて、すばらしい小さい宇宙。その宇宙は皮膚で被われていますが、その皮膚の外これすべて、私から言えば環境だというふうに思います。環境ですね。えてして環境というのは、ゴミの問題、

し尿処理の問題、川とか、せいぜい海ぐらいのものに考えがちですが、私からみれば皮膚の外はすべて環境。ですから、皮膚の一番近い部分の環境、例えば中に入っていけば食品衛生という分野もありますね。それから日射とか匂いとか、身近なセンチ単位、メートル単位で測れる環境がありますけれども、よく考えてみますと、グローバルな問題、よく言われますが、例えば天空の向こうから飛んでくる宇宙線の問題。オゾン層のどうのこうのありますね。そういうふうに星の世界からの影響といいますか、それを含めての非常に壮大な空間、これを全部含めて環境ということに私はしています。

開会集会参加者

さて、しかしそのような膨大な環境、いわゆる環境をただ漠然と考えていたんではとりつくしまもない。考えようがない。具体的に考える場合に困りますので、これまた私流の尺度というのを設けて、環境要素というものに分けて考えたいということにしております、いつも。それは時々大学や看護学校やその他の学生たちに講義をするときによく使う手でありますが、環境というのはこのようにいくつかの要素にわけられると私は考えております。

まず第一に、一番環境を理解し把握するために便利なのは、或いは一つのカテゴリーとして認識できるのは、物理的な環境要素とういことであります。つまり物理的な手段なり認知方法で理解できる分野ですね。漠然としていますが、例えばこの音、静かな音、或いは非常に大きな爆音とか、或いは温度とか湿度とか光など、みんな物理的な環境要素として考えることができるわけです。時々そういうふうに分けて考える場合に、そのかなり具体的に、その現象に迫ることができるわけで、私どもはいつも物理的な環境要素はどうなっているかというふうなことを習慣づけたいというふうに考えております。

二番目は科学的な環境要素です。科学的な環境要素というのは、これも私ども体験してよく分かります。科学的に認知できる世界です。つまり匂いであったり、悪臭ですね。排気ガスであったり、自動車やその他、或いはさんざん手こずりました日本全国の公害の、例えば四日市喘息とか或いは現在でもあり得る都会の自動車排気ガスの問題だとかいろいろありますね。さらに言えば食べ物だって科学的に測定でき、認知できますので、いい意味での栄養の問題も含めて科学的な環境要素だと考えられます。或いは小さな部屋、大きな部屋に集まったときに人々が吐いて出す炭酸ガスの問題も測定できますから、これも科学的な環境要素と考えられましょう。

三番目には生物学的な環境要素として、伝染病の病原体も含まれます。それからいい意味にも悪い意味にも動物の世界がありますね。植物もあります。沖縄には皆さんご存じか、ハブという毒蛇の要素もあります。大きな生物の世界の要素としてのハブがおります。ハブは現在、沖縄の人間にとって、都会に住む人間にとっちゃあ、邪悪なものとして排除されようとしていますが、山にいるあいだは、このハブというのはむしろいて当たり前で、いたほうがいいという存在でもあるわけで、事々さように、ものはそのある場所によってあるべきもの、或いはなくて当たり前といろいろあります。生物の世界もその雑多なもので非常に膨大な世界を構成し

ています。この取り扱いにも注意しなければなりません。またこれはいいも悪いも言いましたが、存在しなければ困るという自然保護行政の対象になるものもありますね。また人間も人格を取って払えば、生き物として生物の内に加えることもできましょう。

さて四番目は社会的あるいは心理学的な環境要素として、人間は一人じゃ住めませんから、かならず隣があり、増えれば家族が構成されますし、外へ出れば路地があり小さい部落があり、そしてそれが集まれば最初の膨大な、非常に大きな事業体と言える市町村という団体ができますね、人間の集まりが。これは一番早い人間が暮らしていくための最初の元締めと言える市町村、皆さん自治体の皆さんよくご存じの枠であります。その次は県、国、国境を越えて東アジアとか、そして地球があり、この宇宙がありますが、一番大事なのはやっぱり家族の次は自治体といえましょうか。そういう社会のなかに人間としてもっている、心理的なさまざまな要素がありますね。嫁と姑の問題、兄弟あるいは友達、労働者同士あるいはその他ですね。助け合いの老人の横丁の問題もありましょう。そういう全部ひっくるめて環境というと私は思います。ですから必ずしもガスの問題とか生ゴミの問題とか或いは車の問題とかいうふうに目に見える世界だけではないということを私は思います。そして又これだけではないんですね。これ全部ひっくるめて人間の皮膚に迫る或いは知能の方に解決を迫る問題がたくさん出てきます。例えばゴミひとつとっても、これいったい物理的なものなのか科学的なものなのか生物学的なものなのか、分からない場合があります。流れて汚して移動していく場合、或いはこの読谷村に落下傘がときどき降ります。これ物理的なものなのか、心理的なものなのか、にわかには判断できない。ひっくるめて環境の怪しい問題を提供するわけです。このように考えると、この環境自治体といっても必ずしも単純じゃないということを、私は傍から見て感じます。

さて、そういう環境の中で人間はどのように過ごしていくかですが、環境はいいとして、その中に暮らす人間の方にちょっと目を落としていきたいと思いますが、人間は、生まれて一生を全うするあいだに、三つの関門をくぐり抜けなければならない、共通にして通らなければならん関門があるとされております。医者の側から言いますと、生まれ落ちる前後ですね、非常に大きな重大な障害を起こしうる関門です。要するに受精して10か月過ぎて産声をあげて一定の成長をするまでですね。その間、市町村行政が或いは国が、県が一緒になって、生まれ落ちる或いは育っていく生命を守らなきゃならない。

先ほどの物理、化学、生物、社会と申し上げたが、ひっくるめて沖縄には沖縄独自の問題があるということを、この図でお示し申し上げたい。物理の中にもう一つスペースというのがあります。広さです。動物が住むには一定の、最小限と言ってもいいスペースが必要なんです。例えばこの中に10年間暮らしなさいといってもできるもんじゃない。例えば鼠でも他の動物でも、狭い空間に狭められて住まわされると、住むように強制されますと、お互い喰いちぎりあってせめぎあいが起こります。鼠だってなんだって、そして殺しあいが起こります。それほどひどくなくても、これ沖縄本島の図ですが、赤い部分が基地です。現在ある基地なんです。もっと前、終戦直後はもっとひどかったですが、全国の大半は沖縄にあると言ってもいいぐらい米軍基地があるんですね。その割合が二割近く、中部地区ですと何割か、要するに私、例を申し上げていつも言うんですが、四畳半の畳一枚、ど真ん中に金網を張られたような感じたと申し上げます。或いは六畳一間の畳一枚を金網張ら

れて、さあそこで一緒に仲良くしなさいと言われたようなのがこの図です。というわけで先ほど申し上げた物理、化学、生物、社会ひっくるめて、このスペースということがあるということ。そし言われぬ、測定できない何とも言えない人間のスペース、住み心地の良さ、Quality of life にとってたいへんな重圧を沖縄は被っているということを、まずはもって、途中ではありますが申し上げたいと思います。

これはゴミの問題でよく使うものですが、この廃棄物はいま沖縄に限らず全国自治体の大きな問題として、住民の全体に、国民全体といってもいいでしょう。解決を迫っておる重要問題です。その流れは生産され、加工され、流通し、消費されて廃棄されてという滔々と流れるものすごい膨大なエネルギーを使って、宣伝もあるし、生産するほうがどんどん消費に向かって押しますので、そのエネルギーに比べてそれを処理し、最後に再生産するというための情報はなかなか流れない。スポンサーがいません。自治体ぐらいしかありませんので、そういうことを実相を先ほどの四つの要素をひっくるめて申し上げたかったんです。

そしてその中で、人間は人の一生のなかで必ず病気が発生します。もう一生涯健康体で病気一つもしないという人間はいません。ですから自治体の最初の大仕事は、病気をなるべく無くし、減らし、なったらなったで早く元のレベル或いはそれ以上のレベルまで押し上げていきたいというのがリハビリですが、そういう大仕事がございます。国がやる、県がやると言っちゃあおれない。もう自治体の大仕事ですね。これは模式的に書いたもので、この一つの図にもたくさんの仕事が包含されておるのをお認めくだされればいいと思います。

2、人の一生と三つの関門

先ほど、この図の前に第一の関門と申し上げました。前後しますけれども、人は必ず生まれ落ちて三つの関門を通りすぎるということです。第一の関門はあの辺でおこります。あの受胎。あれは子宮を表しますけれどもね、上の方は胎児がおりますけど、胎児のお臍が下りてきてお母さんの子宮に着床して、そこで発達したのが胎盤ですけど、水草の根のようなところは赤ちゃんの世界で、厚くなったところは子宮の壁ですけれど国境があります。その国境のなかで、あいだで取り交わされる物質、これは非常に大きな問題が従来、日本の例えばイタイイタイ病や水俣病あるいはその他の公害病と名付けた事件で、しばしばこれを通過して、この胎盤というところを通過して胎児にも及んだ。公害が及んだ。それはもう企業だけじゃなく国、県、市町村の全てが迂闊にも、この国境を越えてカドミウムを胎児に送り、水銀を胎児に送ったために先天性の水俣病、カドミウム病を起こしたということ。この国境のあたりの自治体はよく勉強して、いささかも有害なものを臍帯と言いますかね、胎盤を通じて赤ちゃんに送らないように環境を調整しなきゃならんということです。沖縄では今から20数年前に風疹という、大人にとっては軽い病気ですけども三日はしかと言われるぐらい。それを妊婦に罹らせてしまって、400人以上の、ここを通過したヴィールスが胎児の方にいって、建築中の住宅をめちゃめちゃに壊したみたいに、先天性風疹障害症候群をもった障害児を生まれさせてしまいました。予防医学の失態でしたけれども、そういうわけで、その出産前後の第一関門、これはもう自治体が厳重に注意して、環境を整備し、環境と申し上げたのは必ずしもカドミウムとか水銀とか化学的な世界ではない。またヴィールスつまり風疹とか、ああいう生物学的な世界だけでもない。あれは通過していくものにホルモンがあります。お母さんが出すホルモン。これは例えば耳から

お母さんが猛烈な爆音、或いは嫌な音を聞いたときに、お母さんの脳下垂体、脳のど真ん中からホルモンを出すように指示が出てアドレナリンとか緊張ホルモンを出すんですね。そのホルモンは筒抜けにと言いますか、もうストレートに赤ちゃんの方にいきます。だから爆音は嫌だなという感情論の問題だけじゃなくて、もろにお母さんの脳下垂体から液、つまりホルモンを通して、あの関門を通って国境を通って赤ちゃんにもろにアドレナリンという興奮させるホルモンがいくんですよ。ですからまさしく爆音は生理学的な問題なんで、もちろん心理的な問題もありますけれども。この件は沖縄の実例がたくさんありますから後ほど触れるといたします。要するに第一の関門の周辺の問題です。人の一生のあいだには、これはあの先ほどのゆらゆらとした水草のように胎盤に下りた赤ちゃんの方の世界の最後の部分、つまり絨毛という胎盤。中は赤ちゃんの世界、外側はお母さんの赤血球がありますね。そこで取り交わされるさまざまな物質があります。まさしく物質です。赤ちゃんは呼吸ができませんから、上の矢印のように炭酸ガスをそとに出します。それから入ってほしいのは栄養素、ホルモン、免疫物質、有害物質も入ってきます。そして病原体も書いてはありませんが入ってきます。あの部分を、あの世界を自治体が守ってあげなきゃなりません。つまり母子保健の領域にもなりますね。

さて第一関門を通過すると、次の関門は思春期です。思春期から独立して一つの職業を手に入れるまで、独立まで。その間は非常に大きな動揺に見舞われるシーズンです。思春期から青年期ですね。あの図は有名なスキャマンの発育曲線で私しばしば使う曲線ですが、四つの線が書いてありますね。テンツー、テンツーと左側から上がっていくのは脳みその線です。脳みそが増えていくラインを示しています。三つ子の魂百までと言いますが、下の線は二十歳までの線ですから、三歳四歳までにもう８割がた脳みそが伸びて大人のレベル、上の100パーセントというレベルにいくということがテンツー、テンツーに見えますね。したがって、それをあれして、英才教育とかいろいろしますが、まあ、その辺でしばしば脳性麻痺だとかいろんなことを起こしたりすることもありますが、まあ一つご覧ください。その次は急にぴーんと上がって100パーセント越えるラインがありますね。あれはリンパ系統の発育で、はなたれ小僧が鼻水を出すのもあのラインのせいで、大人以上にリンパの発育が盛んだということを示しますが、申し上げたいのは、その次に実線に示した緩いＳ字状に伸びていっているラインは骨格や筋肉の伸び具合です。十歳代から二十歳にかけて急速に伸びていく。もう骨が太くなり、そして髭も生え筋肉も逞しくなり、もう一丁前の大人になった気分になるのがティーンエイジャーの世界です。あの図は急に伸びているあの辺に非常に大きな問題、心身ともに問題を含む、学校教育上も問題が多く起こりうるということを示します。最後の点線はセックス系統の線です。十歳ぐらいまでは男女とも席を同じくしてもなんとも思いませんが、ティーンエイジャーとなって二十歳に近づくと、なんとなく色気づいてそれぞれの世界に進みますが、私が申し上げたいのは、あの四つの線がばらばらになっていることは外から見たんじゃ分かりません。先ほど小さな宇宙と言いましたが、小さな宇宙で、あのばらばらな変化を一生懸命、彼らは青少年は二十歳代の太い四つの紐がロープになったようになって、一本の逞しい人格に形成されますが、内実はあんな状態ですから、やはり一丁前になったつもりでスピード感に流された、ぶっ飛ばして命を縮めたり或いは大人がしているからといって煙草を吸ったり酒におぼれたり、或いは友情、恋

愛その他に挫折したからといって、それだけで身を縮めたり、いろんなことが起こるのがこの時代なんです。このことの実相をよくわきまえて青少年の問題、私は第二の関門と言っていますが、それを滞りなく無傷で支障なく通れと言っておるわけじゃありません。その内容をよく分からせた上で、その体験をむしろ取り込んで自家薬籠中の物にして（注：自分の思うままにすることができるもの)、将来同じような悩みを繰り返すであろう青少年を指導できるような青年に育っていけば、むしろ挫折はあったほうがいい。友情も破れてもいい、恋愛も失敗してもいいんじゃないかと思ったりします。ただ煙草とかシンナーとか、スピードで命を縮めたりすることだけは止めさせなきゃならんわけで、先ほどの四つの環境要素のどれに相当するかは分かりませんが、そのような大人を含めた環境を整備しなきゃならんと、この図を見ていつも痛感するんです。

さて、そういう中で人間は成長していき、やがて働きそして定年を迎え、終巻期に入ります。その定年前後の問題が第三の関門です。35歳あたり過ぎますと、人間は男女とも全ての機能が衰えてきます。容貌も体力もガッツも落ちていって、そして、それを後押しするのが、生活不摂生であり、煙草であり酒であり、いろんなことになるんです。第三の関門を通過して、いよいよ定年を迎えていきますが、その話はあとでするとして、すべての人間、やっぱり生まれ落ちて一生を全うするからには、やっぱり生き甲斐がなきゃならない。あるいは生活の量は、物量は満たされていますが、生活の質、Quality of life となると、まだまだ考えなきゃならんことがたくさんあると、環境を整えて。さてどのような人生をとなると、ある人が言うにはこういうことが問題だと言うんですね、四つ。

3、Quality of life

まず第一に生活の質を保障するには、なにがしかの収入がほどほどでなきゃいかん。収入ですね。その次には、やっぱりそのあと住居、住まいがなきゃ、有るにはあってもその質が問われなきゃならない。日本はその意味では、我々沖縄も含めて△印、十分じゃないんじゃないかと。マンションというのがあったり、いろいろペンションというのがあったりしますが、私はかつてロンドンに行っていましたが、向こうのマンションというのは全然けた外れなんですよ。もう入口から玄関まで霞がかかるくらい、広い野原を行ってようやく玄関にたどり着くんですね。ベルを押すと中から何分かかって執事と言いますか、上品なおじいさんが出てきて、それから入っていきます。それをマンションと言うんです。ここではもう鶏小屋みたいなものに全部マンションなんて言いますが、尺度が違う。住居の規模が違う、質が違うということはよく言われております。もう狭い沖縄ではそれさえもできない。住めば満ち足りているというのは、この読谷はともかくとして北谷とか嘉手納あたり、こんなになって住んでいるのが大勢いるんですよ。で、住居。それから余暇が問題。

余暇というのは24時間という一日を三等分して８時間は労働します。８時間は寝る。残り８時間はいったい何に使うかということの問題。これを西洋・ヨーロッパとかアメリカでは豊かにいろいろこう人間性を高めたり、こういう宗教その他レジャーにいそしみますが、我々日本人は沖縄含めて、もう働きに働いて何のために働いているのか分からんぐらい、いわゆる余暇、自分の裁量で使えるという余裕のある時間が少なすぎるんじゃないかと、外国からも非難されてワーカホリック（workaholic：働き中毒）と、ワークホリックじゃないワーカホリックと言われています。そういうことで余暇もチェック要

因ですね。時間という環境要素はあるかどうか知りませんが。

さて、最後が問題、いわゆる出番です。人間から役割を取ったら何も残らんという人がいるぐらい、人間はなんらかの役割を持っている。子どもには子どもの役割。そして定年後のおじいちゃん達にも役割をあげましょうというのが特に読谷村での今の掛け声なんですよ。後で触れることにしますが、読谷村はその点、ものすごい勢いで村長さんはじめ全職員そして地域の人たち皆一生懸命になって、いま寝たきり老人もゼロにしよう。寝たきりになったら座らせよう、座っているおじいちゃんがいたら立たせよう。立たせたら歩いてもらおう。歩いたらスーパーまで買い物に行ってもらおうという方向でやっていらっしゃいます。何回も私保健所ですが、保健婦とかＰ・Ｔ、あのＰ・Ｔというのはフィジカル・セラピー（physical therapy）と言って、要するに運動治療法士・機能治療法士、日本には数少ないんですが、そういう人たちが一生懸命になって立たせようとしています。リハビリテーションの世界でしょうかね。これでは何名か保健婦が足りないくらいお年寄り多いですから、ですから老人とか小さい部落でも、ボランタリー（voluntary)な方々がいわゆる出番を作って、昔で言えば勤労奉仕みたい或いは滅私奉公みたいなもんですが、決して国や県のためじゃなくて、おのれ達のためだということで、出番を作って役割を探して、そしてもって働くんですね。人間の一番崇高なところ、この出番というものがないとQuality of life は満たされないということのようです。これをいわゆる環境自治体のなかで目指すじゃないんかと思いますが、先ほど申し上げた環境要素四つプラスアルファ含めて、整えてこれを目指すということじゃないんでしょうか。

４．長寿県沖縄の未来

そろそろ具体的に沖縄の問題に入っていきますか。あれは北谷町の図です。北谷というのは北の谷と書いて、ここ流にチャタンと呼びます。嘉手納の南に北谷という町があります。私の保健所の管内ですが、そこはもう惨め、無残にも基地に取られ、大半。昔の部落はどこに行ったかというと、山の上に押し上げられて、そこに住んでいます。あの黄色いところが住宅地で、他はみんな基地です。これは我が保健所と琉球大学の学者と地元の人が一緒になって北谷町での爆音、ジェットエンジンその他の爆音の影響を調査した図ですが、私あまり詳しくはタッチしていませんで知りませんが、真ん中の放射線状にいっている線は尺度でして、いろんな要素、測定分野で量を測って、薄い色と濃い色は爆音の測定のレベルです。非常にひどい部分とそうでない部分を分けて、その部分での、その地域での障害、イライラとか様々な尺度で測ったものがあれで、爆音のひどいところは神経症傾向ですか、真下。それから左上の仰鬱性（注：心がふさいではればれしないこと）の問題。それから情緒不安定というのが確定的に優位な差でひどいと。要するに爆音の被害の実態を測定した図ですね。先ほどのは男性でしたが、これは女性です。真下のほうには難聴とありますね。それから神経性の問題。それから左上の黒い部分、中央部分と外に出っ張っている部分は、中央部分は爆音のひどくないところ、その外側は黒い部分は爆音のひどいところですから、その差は歴然としているということの調査報告です。〔次どうぞ〕

これは基地によるQuality of life の侵害の問題です。〔次〕

ごめんなさい、暗い話ばかりで沖縄の実態をお話ししなきゃなりませんので申し上げますが、これは米軍基地の面積の全沖縄と北部・中部・

南部と宮古・八重山とありますが、赤いラインをしたのが中部地域、私ども保健所の管轄地域で、なんと基地の占める割合が26パーセントですから、四分の一、四畳半の畳一畳以上を金網で張ったと申し上げたのはそのことです。そこで残る地面にひしめき合って二市二町三村の中部地区は暮らしているということです。そこでQuality of life をどのように確保し、高めていくか市町村長の、二市二町三村の皆さんの御苦労がしのばれるということでお見せしたわけで、沖縄本島全体をみますと19.6で五分の一、六畳間の一畳を金網で張られたような感じと思ってくだされればいいでしょう。そこへ金網の外で暮らしなさい。中へは入るなと言われているのと同じことですから。想像はすぐできますね。

さて、その沖縄でさまざまな問題が起こったことを申し上げて、ご覧にいれます。かつて終戦直後、沖縄には復興再建100万県民総当たりでやってまいりましたが、その沖縄の島は土台こういうところです。この横断面を模式的に書きますと琉球列島というのがありますね、これは九州から台湾にかけて首飾りのように、エメラルドの宝石のように連なった100以上の島がありますが、その南半分が沖縄県です。元々この島々は今から200万年前までは全部陸続きになっていて、台湾、南中国も含めて半島のように出っ張った陸地だったらしくて、その当時から今おりますヤンバルクイナとかイリオモテヤマネコとかハブ一属その他が、ゆっくりこちらへ移住してきたと、北進してきたと言われております。その頃すでに今のトカラ列島、屋久島・種子島の南にはまだ海峡があって、海があって、その北の、本土の九州、四国、朝鮮半島と連なった大陸とは隔たりがあったというようなことです。ですからマムシ一属は沖縄にきておりませんし、ハブは本土に渡っていなかった。さて、その後、陸地が陥没し、また浮き上がったりして現在の琉球列島になったようですが、今この沖縄本島を含め島々の特に中南部の丘の上にあります、かさぶたのように岩石層がありますが、これは大昔の200万年あるいは100万年、あるいは数十万年前の浅い海でできた珊瑚礁だったらしい。上に岩がありますが、ここに私持ってまいりました石そのものが実は非常に穴のたくさん入ったスポンジがそのまま固くなったような感じの岩なんです。隆起珊瑚礁石灰岩と言います。この岩とその下の砂岩、そして粘板岩、粘土の層があります。水を通しません。この粘土の層は大昔の海底の泥だったようです。隆起していった結果、泥も上がってきて岩を押し上げていって現在の琉球列島になったんですね。このトップの岩を見ますとたくさんの穴があって、顕微鏡的な穴も肉眼的な穴もたくさんあって、これに種が落ちると木も生えるんです。これ私の手作りですが、読谷村の皆さんと一緒に最近始めた手作り園芸教室の作品ですが、立派な無人島に見えますね。これを盆の上にのっけて村長室に置いたりするわけで、とても楽しい園芸が始まりました。申し上げたいのは、この石の素材ですが、この石は目に見えない穴がたくさんありまして、雨が降ったら水を含むんです。それで余分に降ったら放します。そういうわけで一種の水のプールみたいになります。それが丘の上にたくさんあって、それで木が生えてなおさら含水能力、つまり水を含む能力が高まっておって、さまざまな亜熱帯の照葉樹林、照葉というのは太陽が照ると、アマテラスオオミカミの照るです。葉がてかてかした椿のような葉っぱ、ガジマルもそうですが、相思樹もそうですが、アカギとかたくさんありますが、そういうものが亜熱帯照葉樹林が育ったんです。その下には当然水がちょろちょろと出て泉が形成されます。その山の岩陰に集落ができ、そこを選んで下のほうには田んぼをこさえ、そして川に

落としてという小さい集落が琉球列島には育ってきたわけで、それが琉球列島の村落の始まりだと思いますね。最近はその村落が大きくなり繋がって大都市になっていますが、元々は岩と粘板と地下水に頼った琉球列島のたたずまいだったらしいんです。ですから、その原点をよく分かっていて開発するなり、町づくりするなり村づくりするならいいんですが、このかさぶたが全部取っ払ってコンクリート材料に使われたり、或いは穴を掘ってなにかをやったり、平坦にしてゴルフ場を造ったりという荒々しい開発には元々琉球列島にはなじまないんです。40何年か戦後、米軍は基地を構築するし、開発はするし、もう本土並の全国並のレベルの基準の開発をしたために何が起こったかを申し上げますと、よろしいですか、これは基本的な構造図ですね。地下水はこのようにネットを構成して海に流れ、井戸にあらわれます。今から20何年か前に南部の具志頭村というところで、怪事件が起こりました。

ある中学の栄養士さん、学校の栄養士さんが調理していて「あれ臭いぞ」と、水道水が臭いと。まず最初の声をあげました。これはおかしいと。水道はそもそも真水、匂いはカルキぐらいであとは透明で色もついているはずはない。匂いはカルキ以外あってはならない。だが臭いということを発見して、すぐ通報して、それでストップしたんですが、なんとその原因が、後で我々研究所や保健所が調べたら、ＰＣＰというものの匂いだったんですね。その経緯はこうです。中南部さきほど申し上げた岩石地帯がありますが、米軍は今から、要するに戦時中ですね、沖縄戦こっちこの日に上陸して南北に分かれて攻めていますから、米軍はどんどん進撃をしながらも道路を造っていたんですね。ブルトーザーも陸揚げして、穴を掘ってコーラルと言いますが、石灰岩を掘って砕いて道路を敷きつめてアスファルト敷いて、どんどん物質を運んだ、前線に。前線といってもほんの10キロメートルですよ、沖縄本島ですから。このようにして戦時中に掘った穴があっちこっちにあるんです。採石場と言ったら恰好いいですがね、米軍が道路構築をした、その採石の跡なんです。この坑道みたいな洞が開いているんです。窪みができているんですよ。そこに戦後バガス、キビ殻ですね、製糖工場のキビ殻、キビ粕を捨ててあって、これなら有機物なのでいいんですが、その捨て場にある米軍物資払い下げ業者がドラム缶、当時はベトナム戦最中でしたかな、ＰＣＰあの例のＰＣＰというのはご存じでしょうか、ペンタクロロフェノール（pentachlorophenol)ですかね。あの猛烈な毒をもった、そして枯れ葉剤に使ったものですよ。ベトナムをどうにもならない茫漠たるジャングルを何とかするために、ゲリラをやっつけるためにＰＣＰを撒いて枯らして出てくるベトナム兵を射撃するという寸法でしょうね。結局は失敗しました、米軍は。お陰でベトナムではこのＰＣＰその他による枯れ葉剤による先天障害児をたくさん生まれさせてしまいましたが、とても大変な罪ですけれども、そういうのが沖縄には山積みされて、軍事物資ですが。それが腐れそうになったもんだから払い下げてしまった、迂闊にも。こっちも迂闊でしたがね。払下げるときはいずれ何かに使えるだろうと思ったんでしょうがね。ＰＣＰというハイカラな名前ですから。それを国場川というところに積み上げて置いたんだが、使いようがなくて腐れていくうちに漏れ始めた。県がこれやばいから処理しなさいよと言ったら、慌ててトラックに詰め込んで捨てちゃったんですよ、あの穴に。そしたらこのＰＣＰが、ズンズクズンズク濡れて、学校給食の水道まであらわれたんですよ。その間2000メートル地下水を走って子どもたちの水道水まできた。子どもたちだけ

じゃない、もうあの辺り一帯のいわゆる南部水道というのがありましたが、当時。もう今は大同団結しておりますが、その水道が半年近くストップされて、この洗いなおしに時間がかかりましたよ。そういう島なんです、ここは。荒々しい、戦争は御免ですが、その後始末にものすごい開発を進めると地下水から裏切られるということを、この事件は物語っています。まだまだありますよ、この狭い沖縄で荒々しい事業が、開発が、政策が、国策が横行するととんでもないということを申し上げたいんです。

まずこれは同じく南部ですが、ある日ある時、地方の集落の泉ですね、湧き水。戦前から最近に至るまで、あちこち、さっき申し上げたこの岩山の裾に泉がたくさんあるわけで、その泉に伝統、非常に由緒ある泉にちり紙が浮いてきたというんですよ、ちり紙。とは言ってもそんなにがさがさしたもんじゃなくて。非常にハイカラなティッシュペーパー。上品なちり紙が浮いてきたんです。２、30年前だから、そんなちり紙を使っているのは沖縄にいない。あるとすれば米軍なんですよ。ハイカラなちり紙ですからね。研究所も飛んでいったら、なるほど立派なティッシューがもうもうと上がってきたんですよ。これは大変だと、皆飲んでいて、米も研ぎ芋も洗い、それで田んぼにも引いている伝統的な中村渠という村ですがね、出てきた。やばいと言うんで、すぐ給水ストップ、使用をストップしてね調べようとしたんだが、どこを見てもその便所があるわけじゃない。部落にもそんな上品なティッシューを使っている人はおらんし、当時は水道、下水道も不十分でしたから。調べたらはるかむこうに星条旗が翻っている。しかし遠すぎる。こんなことはないと言って、まあ行ってみようということで行ったら、閉ざされて入門禁止ですよ。要するに入っちゃならない、いやそうじゃない、村に衛生の問題、重要な問題が起こったからちょっと調べるだけで見せてほしいと問答して１時間２時間ねばって入れてもらった。中は基地ですから立派に最小限のことはやっておる。住宅地もあれば兵舎もある。見たらマンホールがあるんですよ。開けて見たら同じティッシューが流れてきたんですよ。これに違いないと思っても証拠がない。それでお願いして、調べさせてほしいと。あそこにティッシューがきているからこっちと関係あるかもしれんからと言いましたが、「そんなことはあるはずがない。我が方はちゃんと処理している」と言う。いやいやとにかくあのティッシューとこのティッシューの因果関係を調べるからっていうんで、まあ結局あれはフローレセンス（fluoresense ）蛍光色素というのがあります。今バスクリンかなにか風呂に入れてパッと発色する、爪先ぐらいで海これぐらい坑道をぜんぶ緑に染めてしまう蛍光色素がありますがね。それを１キロ２キログラム放り込んで水を滔々と流して、もし出たら旗振れと言ったら下で振っているんですよ。つまり蛍光色素マンホールに入れて滔々と流したら、村のあっちに色素が出たというわけです。暗いところで懐中電灯で見せれば、この水透明なようでも光るんです。それぐらい便利な色素がありますが、そういう結局その基地由来の汚染だと。考えてみれば、ずぅーと米軍のウンコを飲んでいたというようなもんで、唖然としますけれどもね。今でも慄然としますけれども、そのせいかしばしばこの辺は赤痢やら何やらさんざん迷惑を被りましたよ、戦後数十年間。今はゴルフ場なってしまっていますが、その直後、彼らはパイプをずっと海に沖の方に流すように下水道を完備させました、我々が。今となっては懐かしい事件ですけれどもね。

これは隣嘉手納町、まだ極東最大の基地がありますが、これ何年か前でしたが、ある日、こ

れ嘉手納基地です、巨大な基地があります。この集落はみんなひしめき合って嘉手納町がありますけれども、その嘉手納の町の集落の井戸にポッと火が付いたと言うんですよ。マッチを入れたのかもしれませんが。燃える井戸という事件です。びっくりして何で井戸が燃えるかと調べたら、何かしら石油の匂いがすると言うんですよ。これ誰が放り込んだのかというんで研究所や保健所が来たら、軒並み調べたらあちこち油が滲んでいるというんで、これはやっぱりお隣さんだなということで調べた。調べたらあのように黒い星印が油の汚染した井戸ですね。四角いのもありますが、そんな状態で、これはしかし基地以外に原因はないと、地下水から来たんだろうということで、申し入れしたんだが「そんなはずはない」という一方で、じゃあせめて航空燃料のサンプルでもちょうだいと言ったら、「県にはあげない、嘉手納町の町長が来るならあげる」と言うんです。町長と県は一緒だと、県民がおってここに嘉手納町民がいて別々に暮らしているんじゃないと、町民、全市町村の上に県民というオブラートがあるだけで透けて皆同じもんだと、よこせと言ってもなかなかくれませんでしたが、結局あるルートで航空機燃料、ジェット機料ですねサンプルもらいましたその結果をお見せしましょう。油分を分析するにはガスクロモトグラフ（gaschromatography)という分析機械を使いますが、上の図はガスクロというやつで分析した油の、井戸から出た油ですね。一番上の検体そのものは。住民側からもらった井戸の。こっちは航空燃料です。似ているけれどもピタッと一致しませんので、いろいろ処理をして、化学的にいろいろ調査してピタッと、あなた方のジェット燃料だと、どうするんだと言って、ようやく解決をみた。民間航空のは出るはずはないんで、これはパターンですね、全く違いますね。要するに嘉手納基地からきた油だということを化学の力で究明してギュッと言わしたということですね。そんだけの話ですが。

　で、まだあります。この辺から南のほうへ行きますと那覇市があり浦添市がありますね。この浦添市、宜野湾市に当時、牧港サービスエリアという米軍の補給部隊がありました。もう非常に広いところに倉庫が並んでいて、そこにミルク工場もあったくらいですね。これは上が西です、こっちは北です。西海岸、牧港と言って今でも川がありますが、そこに非常に広い補給部隊があった。ある日ある時、その辺の漁民がとても困ると、海が死んでいきよると、汚されている。どう考えても米軍の基地のせいだと、なんとかしてくれと来たんですよ。泥を持ってきたり、死んだ貝、生物あるいは昔あったアオサと言いますけど海草、その黒く今にも腐れそうなやつを持ってきたりして、何とかしてくれと言うんですよ。我々県民の立場ですから行ってみたら、なんとまあやっぱり海じゃない、浜辺は死んでしまっている。どす黒く。これはやっぱりこのせいだなと。しかし米軍はあの川の下流だから川のせいだと言い張るんですよね。住民地域からのもんだと。そうかじゃあ一緒に調べようというんでやってみたのが、これで。しかし日米地位協定とかいろんなバリアがたくさんあって、市町村ならストレートにいろいろ頑張れますが、県があり、相手があると大変でした。もう行政マンだけじゃどうにもならないから、化学者同士委員会つくって腹を割って化学的にいこうというんで、私は一方の委員長になり、相手は良心的な化学者でしたが、委員会つくって事実は事実でやってみようじゃないかとやったんです。海岸線から沖のほうへポイントをいくつか設け、海岸線にもいくつかポイントを設けて、一例を申し上げますと、こっち海岸ですね、この辺が部落です。円を描き距離を呈し分析値を入れた。そしたらズバリこの米軍

の排水口を中心として濃度が分散している。あなた方ですよと。化学的に相手に言ったら、相手もさすが化学者「分かりました、ごめんなさい、何とかします」と言いました。で、この浜辺全部、泥を取っ払ってきれいなビーチから砂浜を持ってきて埋めなさいと言ったら、最初は渋々していましたが、入れましたよ結局。何十台というトラックに積んで、真っ白い砂を入れてきれいにしてくれました。化学者が言うのを向こうの行政はよく聞いてくれます。化学のデータを突きつければね。その辺が昔の日本とは違いますよ。

そういうわけで戦後このかた散々苦労して、この狭い沖縄の地面を利用して、市町村行政は、自治体は頑張ってきました。これはそのエリアを改修させて、砂浜も取り替させてね、今の58号線、国道ですが、こっちは北です。西海岸いまきれいなレストランがあったりコンベンションセンターができたり、或いは中学校・高校があったりして、すばらしい環境になっています。ものすごい血の滲むような努力を行政がなさって、それで今日の沖縄の言うなれば長寿と言いますか、長寿県まで到達しているんですね。けなげだと思いますよ。沖縄の市町村、住民の奮闘ぶりは。だが依然として、やっぱり先ほどお見せした、この体に艦砲の弾が入ったままの状態、首にも艦砲の破片。砲弾の破片があるし、この辺にも巨大な基地に鉄片が入っているし。含んだまま、復興しろ開発進めろと言っているようなもんで、大変だと私は思いますね。特に中部は四畳半の畳一枚。取っ払われているような状態で、それで頑張れですよ。おまけに上からは落下傘が落ちてくるんじゃ、おちおちとてもじゃないが青少年を中心として、肝の柔らかい連中はおれたもんじゃないですよ。私はそう言っちゃあ非常に語弊があるでしょうが、幸いながら首里におりますので古都首里城の下、静かでまあ最小限の人間の暮らしはさせてもらっていますが、このあいだ保健所の仕事で宜野湾市というこれまたど真ん中に普天間飛行場という、こんなのが鉄片に入ったような市です、宜野湾市。そこの近くの小さな公民館にエイズの話をしに行った。７時頃からと言うんで行ったら、８時から始まってお腹はすくしイライラして話をしたんですが、エイズの話。そしたら２、30名集まって下さいましたが、話している一時間以内に轟音が何回も上空を、すぐ屋根の上を飛んでいくんですね。とても話どころじゃなかったんですが、ともども頑張って結局エイズの話を進めましたが、私ならこんな所に住めませんねと言ったら叱られました。「ここ以外に住むところはないから居るんだ」とね。ごめんなさい、私うかつに首里から来てうかつなこと言いました。しかしまあ40年もほんとに大変でしたねと言ったら、許してくださいましたけれども、私が申し上げたいのは基地の重圧が依然としてあるということ。はっきり申し上げられますね。沖縄の中部は特に。中部というところは非常に落ち着きのないところで歩いてみても何となく国際的と言っていますが、そわそわしているんです。医者の目から見てもコミュニティの安定がまだ得られてない。中部の戦後処理はまだだなと思う気がします。その証拠かなにかしりませんが、中国残留孤児というのが最近ありましたね。話飛びますけど、そこから故郷日本へ帰ってという、家族は期待しますね。帰らずに中国に帰った人もいましたけれども、たまたま中部日本のあるところに家族、残留孤児として帰って来たんだが、浮き上がってしまって、それで居れなくなって沖縄に来てしまったというんですよ。沖縄に縁故があるの？と言ったら、片言の日本語で「ない」なんで沖縄に来たの？「ここは一番住みやすそう」だと言うんですよ。北部でもない南部でもない、那覇市でもない、

中部に来たというんですよ。「ここは何となく毛むしられた連中が住むには肌心地がいいような気がする」と、こう言うんですね。一方、沖縄県は移住県として中南米ハワイにも20何万人か移住者を送っていますが、この二世三世も横浜とか行ったり、いわゆる出稼ぎですね。ずっと居たいという人もいるでしょうが、稼いだら又ペルー、ボリビア、アルゼンチンに帰りたいという人もいるでしょうけれども、沖縄にもたくさんペルー帰りの人が多いんですがね、そのペルー帰りが一番多いのが中部なんですよ。ここ出身の人に限らず、中部に来て何となく肌合いが合うというんですかね。もう固定した隣まで全部監視の目が届いているミュニティじゃなくて、なんとなくワッサイワッサイと居れそうな中部だというんですね。一面そういうところありますが、一面またああいう、今申し上げたのは肌合いがいい、なんとなく受けてくれるという寛容なところがあるという意味で申し上げたんだが、一方、基地の重圧というのも実はある。これはもう、先ほど申し上げた四畳半に一つということをお考えになってくだされればすぐ想像できますが、この基地の重圧によってどうなるかと言うと、地図上ですぐ分かる通り、地域が分断されているんですよ。北谷町がそうです。もう山の上に追い上げられて、昔は枢要な非常に有名な米どころだったんですよ。一等地。米殻地帯です。そこを基地があって、極東一の基地になっているから、その住民はずぅーと山に追い上げられて、嘉手納もそうです。読谷も落下傘が降る。宜野湾市もど真ん中に普天間飛行場がある。沖縄市もそう。ですからアメニティ、アメニティというのは片仮名で書いていますが、住み心地の良さとしましょうか、或いは人間らしく快適に過ごせるという或いは持っている能力を発揮できる環境状況と言いましょうか。先ほど申し上げた四つの環境要素を含めても、社会的な環境要素を含めての、隣と善隣関係のあるかも含めての心地よさ、ですからただ冷房の効いた空間でアイスクリームを舐めながらテレビを見るという物理的な安楽さじゃない。そのアメニティは年々減っていく或いは年々じゃない、もうぎりぎり減っているんですね。米人は右往左往します。フィリピンからも働きに来ています。その異文化と接して子どもたちを中心に、沖縄というところは国境の向こうの問題も我が物としてよく捉えて閑雅（注：落ちついて品がいい）、温雅にやさしくとれる資質があるにはありますが、あまりにも劇的に地域分断されコミュニティーが分断され、異文化が入り込んでくると落ち着きというのがなくなります。加えて沖縄とういのは、全国特に北海道からこっち、時間差１時間以上日の出・日の入りが遅いんです。ですから、当然例えば６時でもまだギンギラギン、７時でもまだ夕方、８時でもまだ宵の口、９時頃が一番いい頃、10時なったら真っ盛り、11時でもまだ店は開いているという具合で、夜型社会に当然なっていますが、また習慣上もそうでしょうけど、それで子どもらが誘われて行く。

それから一方向こう側、雇用の機会も不安定だし、教育も全国文部省並だし、それからやれ行けそれ行けの競争原理は全国的にありますのでね、先ほど申し上げた環境要素の四つ目の心理的な状況も不揃いですので、子どもたちがつまり家族が乖離して、家族が分解して共稼ぎでがっちりしてくればいいんですが、子どもが離れていく。塾へ行くのならまだいいんだが、要するに遠心力が求心力よりも強いということでしょうか、この地域は。大変だと思いますよ。市町村の行政も教育も。そういう所です。

後半は沖縄の話ばかりになりましたが、それをよく捉えてアメニティですか、沖縄の言葉でいえばチムグクルというのがあります。チムと

いうのは肝、肝心の肝。ククルは心です。チムグクルというのは沖縄の心、精神風土をずばり言い当てた単語ですけれども、このチムグクルを寄せ集めて、いま中部。少なくても中部二市二町三村は頑張っています。

どのようにどう頑張っているかは、皆さま共通の問題、例えばゴミの問題ですね、このゴミの問題も喋らせると又一時間ぐらい喋るぐらい情報を持っていますが、ゴミの問題はそこにある嫌なものをあっちに処理するという問題だけじゃないんでね。ゴミも物性に従って、いま燃えるゴミ燃えないゴミがあって非常に時代遅れの分別をしていらっしゃいますが、多くの市町村。これじゃいけないんで、少なくても五つに分けようと提案したんです。

一つはビニールプラスチック、これは燃えますけれども元はと言えば石油。化石燃料。その元はといえば植物ですよね。太古の昔の大木が地下にいって石油になったわけですから。それが人間の手を加えてビニールとかプラスチックになっています。それは土に戻りません。食べるわけにはいかん。これはこれでまた化学の力で元の姿か或いは別の姿に変える以外にない、これが一つ。二番目は紙。これも元はといえば東南アジアの森林ですよ。あそこの原住の人を追い払って森を削って持ってきて、日本で紙にして使用しているんですが、私らが裏が真っ白だったら捨てきれませんでしたが、今の若い人たちちょっとミスしたらすぐ捨てる。罰当たりなことをしているんですね。これをよく市町村民、自治体一番ど真ん中に一番底辺にというか土台にいらっしゃる方々に良く分からせて、これは東南アジアの森ですよと、どうせこれを廃棄するならこれを再び紙にしてもういっぺん使う。

最後にどうしも使えないならチョップにして土に戻そうじゃないかという思想。原理哲学とをあれしなきゃ日本民族はもう、沖縄言葉でいいますとフリムンになる。触れてしまう。駄目になってしまうという意味です。紙も再び紙に、できなければ土に戻すぐらい、焼かないで。焼いたら二酸化炭素になって地球規模、グローカルと言いますが、グローバル（global）な汚染にもつながるということ市町村の住民に分かってもらえれば再び日本は、列島改造以前の、もう少し前のいい国になるんじゃないでしょうかね。これ紙二番目。

三番目は生ゴミですよ。生ゴミっていわゆる生、クッキングしていないがゴミじゃなくて、クッキングしたあとのチキンでも、魚の骨も全部生だと、つまり自然に帰れる、帰せる、帰すべきものとして有機物として扱わせるように自治体が連帯して市町村住民と一緒になって処理するような哲学を持たんといかんと思いますよ。台所のゴミを真っ先に、そして暴風の後この沖縄では枝が落ちて葉っぱも散る。これさえ束ねて焼却所に持っていくという変な風潮が市町村にあります。沖縄、残念ながら。昔の人はこれさえも刻んで畑に或いは屋敷の壁に積み上げて堆肥を作って畑に戻したもんですよ。その農法あるいは家庭園芸なんといいますか自然物、有機物を大事にする思想がいつのまにか無くなってしまっている。農協が繁盛し、金肥・化学肥料を押しまくり堆肥はちょぼちょぼ。よその県からきた堆肥を金で買うようになっていますよ。この沖縄の人たちまで。おかしいじゃないですか。ですから生ゴミ、台所のゴミは絶対屋敷で処理して畑に落とし或いは集落で堆肥を作って畑に戻すという思想をモノにすれば、今三つの分類の方法を言いましたが、そのことを自治体といわんでもいい、住民が、大人がせっせとやってみせることによって、その背中を子どもたちが見て物を大事にするという思想、情緒が育つんじゃないでしょうか。物を大事にし、まだ

残っている価値、残存価値を認めてそれを再び浮き上がらせる、価値を在らしめるという行いは子どもたちが見るということは非常に大きな巨大な教育活動になると私は思うんですよ。集落で町でそれをやらずして、ただ食いたい放題食わせて、消費しほうだいさせて、後は市町村自治体の焼却所の何億かけて処理させて、それで進学競ってという国民が、県民が、市長村民が育つともう危ないですよ。沖縄も日本も。で、分類は三つです。紙の世界もゆるがせにできない。以上三つはみんな有機物ですからね。

四番目にガラスですが、幸いこの読谷村にはガラス工場ができました。再生工場。見事なガラス製品ができていますよ。お帰りにはぜひご覧ください。それからガラスはどこかの県では10いくつかに分けて、色別に褐色瓶、透明瓶、ブルー、グリーンなどなど。それぞれに分けていけばそれぞれまた活かせるというんですよ。この地元のガラス工場の持ち主もですね。色別に分けてできれば洗って持ってくだされば全部金になります。お願いしますと言っているんですよ。それを地域の人たちがお母さんたちを中心に一緒になってガラスを整然と清潔に運び出すという所作、運動、活動がもろに子どもたちの実戦教育になると思います。

次に金属です、五番目は。これもいま鉄が安いとかアルミはちょっと値が張るとかいろいろ言いますが、安いから集めて処理するんじゃなくて、もう環境そのものの基本的な事業として安かろうが悪かろうが、場合によっちゃあ市町村が補助でも出して缶を集め、鉄は鉄、アルミはアルミと持っていく。つまり物性に従って再び値打ちのある世界へ旅立たせる。再出発の旅だということを村から、先ほどちらっと物の流れをお見せしましたが、流通産業というやつ。あれはスポンサーがいて生産者がいて、資本主義の原理にのって滔々と流れる、いうなら大河のような止めようもないものですが、逆に使った人は逆に流して、逆流通産業というもの細々ながら発達させて再出発の旅路を市町村、自治体がやっちゃうということをお願いしたいと思いますね。

以上五つの少なくても五つの物性にしたがって再利用の方向へ持っていくという自治体ならではの仕事が多いにあるし、一方またエイズとかね再び人類を狙おうとしている大きな病気あるいは同じく人類を特に先進国の我々をみまっている成人病。昔は物がなくて病気になった。ビタミン不足、蛋白不足で結核になったり鼻水を垂らしたりさまざまありましたがね、いま物が余って糖尿病になり高血圧になり、そして煙草吸い放題、飲み放題で心臓に送るということで、余ってるとみんな起こる病気がまた目の前にきております。それをいかにしてトータルな環境を整備してあげて、先ほどいくつか要素をあげましたが、最後に心理的・社会的な中には健康習慣というものもあります。英知としての習わしとしての或いは運動としての、煙草はやめようじゃないかと、この会場にあって煙草を吸っている方がいらっしゃったら煙草をやめるか自治体職員をやめるかどっちかにしてほしいですよ。とてもじゃないがそういう方が自治体職員にいらっしゃるかぎり日本国民を守れません。ですから煙草をやめるか自治体職員をやめるかどっちかにしてほしいです。示しが効かない。心筋梗塞やら高血圧すべてつながっています。まして子どもたちの時代から吸い出すと、もう環境自治体はクサムニーと言いますが、沖縄の言葉では。資格がないんですよ、自治体として。まず自治体のビル、庁舎そのものクリーンに環境を整備する意味で煙草は絶対やめてほしいと思いますね。今やめたいながらやめきれないという人は、このチャンスに沖縄に来られた機会を契機にぜひやめて末永く長生きしてく

ださって、また沖縄にも何べんもこられてくださいと言いたいですね。

とりとめのない話をいたしましたが、まとめますと環境というものは、ただ触れる測れる世界のものだけじゃないということ。分ければ物理・化学・生物・社会・心理そしてその全部をひっくるめた落下傘が降ったり、米軍がドンパチやったり、開発行為がじわじわとやってきたりですね。最後に申し上げますが、世の中にはいわゆる弱物というのがあります。弱物といって思い浮かべることはすぐ肢体不自由児を思いますが、そうではない。1917年かなロシア革命、プロレタリア革命がおこって、その前に産業革命があって機械が発達しタービンが発達し工業化され、農村の人が労働者として都会に集まり、集まったら集まったで衛生の問題が発生する。一方富める者と手段を持っている者と働く者と格差ができて弱い者となって団結しなきゃならんというんで起こった革命だったんでしょうが、結果としてやり方が間違っていたのかもしれんが、いわゆるロシア革命というのは失敗したんでしょうけれども。じゃあいわゆる弱者というのは無くなったかというと決してそうじゃないでしょう。広い意味で考えて、弱者というのはもう至る所あります。いつでもあります。相対的なものとして見れば。なぜなら例えば、病人は健康な人に比べれば弱者ですね、たとえ一時的でも。あるいは御老体は若者に対しては弱者です。相対的に。そうでない場合もありますけれども。それから女性といっちゃあ叱られるから、母性ですね、生命を今まさに生産中の母性はやっぱり少し弱者の立場にありましょう。相対的に一時的に。あるいは子どもは大人にとか。外来のお客さんは地元の人間にとっては一時的に、土地不案内という意味でちょっとした弱者の立場になりましょう。ずっと不偏して言えば、自然物は人間の開発に対して言えば弱者でしょう。そして自然保護の対象になっているさまざまな在来のメダカとか、沖縄ではアユなんか今一生懸命再生させようとしていますが、これなどは南方からきたテラピアとか猛烈に食い意地の張ったのがいますが、あれに対しては弱いし等々。考えてみれば至る所弱者があるんです。いつまでも弱者であるわけじゃなく、時にはまた頑張って強者にもなりうる。そういう相対的な目でみると、手を差し延べてあげなきゃならない立場の者なり人なり、自然現象などたくさんありますね。それを守ること、これが、私は医者ですから絶えず弱者の立つ思想ができてます。病人を筆頭にこういうぶっ飛ばせばすぐに消えるものも含めて、天然自然記念物も含めてですよ、川も海も含めて珊瑚礁も含めて、そういう思想が大事じゃないかなと、革命がどうであれ、どういう世の中になってもそう思うんです。そして全体としてかばいあわなきゃならない。マイナスの人がいたらプラスを、プラスはそのままプラスになっていくことによって全体がずしりずしりと前進していくんじゃないかなと、決して、しかし女々らしく弱者ばっかり見て悲嘆にくれたり、積極的なことばっかりやれという意味じゃなくて、逞しく伸ばす或いは伸びる方向は堅持しながら、そういう政策も堅持しながら弱者を見落とさず、機敏にその存在を確認し手を差し延べる。こもは国じゃできない、国はやろうとしてしばしば大量の弱者をつくる変な癖があるんですよ、歴史上。自治体がやれることだと思うんですね。環境自治体という言葉、今日私初めて見ましたが、すごい言葉だと思いますね。環境自治体、すべての領域に環境主義を取り入れる。その環境主義の中には人だけが持っている環境、つまり社会・心理的な環境、弱者に対する配慮もできるような第四、第五の世界ですね、環境要素があるということを申し上げて私の話は終わりたいと思います。

非常に雑駁な話でしたが、最後にこの島、これは先ほど申し上げた海辺に打ち上げられた軽い珊瑚礁石灰岩ですが、読谷村のなんとかグループが弱い人たちを助け合うグループが手作り園芸教室をやろうというんで私呼ばれて行って、これを一緒に作ったんです。これ後で大量生産して陶器で似たようなものを作って島一つずつ全国の皆さんにお持ち帰り願おうという、非常にノーベル賞的な発想をして頑張っているわけです。手の不自由な人もできることが、余裕のある人も一緒にやっているんです。そういうのがこの読谷村でふつふつと盛んになっているということを申し上げて終えたいと思います。これは村長さんに差し上げてあります。以上、どうも失礼しました。

司会（先崎）

煙草をやめるか自治体職員をやめるかという大変ショッキングな御提言がございました。吉田先生から専門的な角度から環境問題についていろいろ御提言いただきましたし、また現代版の紙芝居を使って、基地の重圧の下での沖縄の環境の現状等につきまして、詳しい御説明をいただきました。改めて皆さん、拍手で感謝をいただきたいと思います。ありがとうございました。

この次は明日の分科会の問題提起をされる方に御登壇いただくわけですが、準備の都合上若干お待ちいただきたいと思います。昨年の第一回環境自治体会議でも、分科会が三つございまして、それぞれ問題提起をいただいて、それを深める形で話し合いを進めてまいりました。ところが参加者が非常に多かったために問題提起が長いとその後の討議が十分できなかった。そのような反省から今年は初日で、まず全体で問題提起を伺って、そしてそれを基にそれぞれ次の日の分科会で深めていくという、そのような方法にいたしました。それからそれぞれお一人約15分でお話を伺って、そしてそれを基に明日の分科会でいろいろ話し合いを深めていただければありがたいと思います。

それではお待たせいたしました。問題提起をされる三人の先生方御登壇ください。読谷での集会テーマは「地球・南北・環境」でございます。そしてそれを深めるために三つの分科会が用意されておりますが、第一分科会は「南北問題と環境保護」についてでございます。問題提起をされますのは帯広市長の高橋幹夫さんでございますが、よろしくお願いいたします。

高橋幹夫氏・北海道帯広市長

高橋幹夫

御紹介いただきました北海道帯広市の高橋でございます。第２回環境自治体会議問題提起ということで、先ほどの吉田先生のお話ですと、私もヘビースモーカーなもんですから、問題提起をする資格があるか、市長の資格があるか甚だ深刻に悩んでおりますけれども、とにかく務めを果たさせていただきたいと、こんなふうに思います。まだ北海道のほうは気温が20度前後ぐらいで、今が一番爽やかな住みやすい季節であります。こちらの方はもう26度ということで、私は汗かきですから、ほんとはこんな上着を着ていますと大変なんですけれども、そのぐらい地域差といいますか緯度の差があるということで、日本は誠にこう縦長で広いなということを今日一日で実感しました。札幌から大阪に飛んできまして、大阪から那覇に飛んできました。

今日は横風が強いということで飛行機が降りないんじゃないか或いは降りても花巻空港みたいなあんなことになったら大変だというんで、これだけは資料だけはしっかり持って、他の荷物は犠牲になってもいいと、そんな悲壮な構えで出向いて参りました。前置きはそのぐらいにいたしまして、今回は丸谷先生に有無を言わず、わけの分からないうちに、とにかく来いという話になりました。実は私は市長になって３年ちょっと経った新米でございまして、そういう意味でもこの大事な会議で問題提起というのは本当は資格がないのかもしれませんけれども、お許しをいただきたいとこんなふうに思います。

帯広市は北海道に32ある市の一つですけれども、人口の順番に言いますと、札幌が一番多くてその次が旭川という所で、それから港町の函館がありまして、そしてやはり港町で歌で有名な釧路があって、帯広は人口が約17万ということで５番目ぐらいの人口規模になりまします。市域の広さは618平方キロぐらいございまして、これをちょっと比較をしますと、東京都23区よりちょっと広いぐらいの広さになります。その中に人間は17万住んでおります。大半は山林それから基幹産業は農業ですから畑、そして人間の住む所と、もちろんいろんな動物も住んでおりますけれども、そういうような所であります。開拓の歴史はまだまだ浅くて、去年、開拓の歴史で言うと110年を迎えました。市になってから60年。それ以前はどうかと言いますと、北海道は大半がそうなんですが、幕末から明治にかけるまでは北海道というのは、特定の地域を除いては鬱蒼たる原生林に覆われていて、そしてその中に狩猟民族といわれている先住民族であるアイヌ民族が住んでいた、そういう地域であります。ですからつい一世紀前までは緑の大原生林、横浜国立大学の宮脇先生のお話で言わせますと、北海道の自然は北半球では19世紀まで残った奇跡であると、まあこんなふうに実は言われておりまして、その奇跡の中に住んでいる我々は大変幸せであるということが言えると思います。そしてなおかつ先住民族のアイヌ民族が狩猟民族ということで、誠に自然と、生態系と調和をして生活をしていた。そういう奇跡を残した要因にも我々は感謝をしなければならないということが言えるかと思います。110年のあいだに原生林を軒並み切り払ってですね、猛烈に切り払って開発という名目でしょうけれども、原生林を切り払ってきた110年であったわけであります。とは言っても、戦前までは人間の力のほかには、馬の力が農業の中心でありましたから、戦前のテンポは遅かったんでしょうから、言ってみれば、この帯広のまちというのは先ほど言いました618平方キロ、大半が平坦な平野でありますけれども、大体、戦後のですね４～50年ぐらいの間に今のようなまちになったというような、極端に言えばそういう言い方ができるのかもしれません。それでそういう中で、私もそうですけれども市民の大半は身の回りに豊かな緑とか、おいしい空気とか水とかですね、それから豊かな土とか、そういうものがあるのは当たり前というような意識が多分にあります。そしてまた生活の向上とか開発とか、そういうものは何かというと、やはりですね木を切ることだというのが我々の価値観ではなかったか、そんなふうに実は思います。しかし、そういう中でも我々のまちでは自然に対するかかわりというのはわりと早い段階から考えられておりまして、今日与えられたテーマは時に自然環境保全条例がどのようにしてできたかということですから、それについてお話をさせていただきます。帯広が豊かな環境に恵まれている反面、まちの中からどんどん緑が少なくなっていく、そういうことでいいのかというような反省もひとつございました。20年ぐらい前に帯広の市街地

の野放図な展開に歯止めをかけるということで、私たちは「帯広の森」と呼んでおりますが、市街地と農村部を森林のベルトによって遮断をして、生産緑地としての農地とそして人の住む所の市街地域をですね、そういうものをきちっと区分けをして、それぞれの良さを生かすようなそういうまちづくりをしようという考え方に立ちました。この帯広の森というのは20年前に市議会では特別委員会まで開いて大議論になったんですけれども、わずか一票差で事業実地が決まりました。今は市民参加も得た大きなまちづくりのシンボル的な行事として、もう19回の市民植樹祭というのが行われておりまして、今年もついこのあいだ終わりました。だいたい市民が６千人から、多いときは１万人ぐらい参加して、今までに植えた木が16万本ぐらい、参加した市民がのべ９万人ぐらいになりますか、そういうことが実は行われてきました。そういう時点では今のようにまとまった自然環境に対する考え方とか生態系的な考え方とか、そういうものは当時はなかったんですが、とにかく豊かな森を造ろうということで、400ヘクタールほどのかつて樹林で覆われた自然を開拓して畑にしたところにまた木を植えるという、誠に非生産的なことなんですけれども、そういう森を造ろうということで取り組みを始めて19年目になります。私はその延長に、最近の自然環境の問題などを踏まえて、帯広市自然環境保全条例ができたというふうに考えています。私はたまたま市長という立場で先導役をさせていただいておりますけれども、これまで申し上げた帯広の歩みの中でこういうものができたというふうに考えております。それと同時に時代的な背景として、日本の国は一極集中とか首都圏集中とか、北海道なんかも特にそうですけれども、片方では過疎が進む、若い人がいなくなる。そういうような状況、そしてまた経済大国といわれるような経済的な豊かさを追求した中で一つの反動としてのゆとりとか、リゾートという言葉に表されるようなそういうものを追求した結果、リゾート法なんかができちゃう。そしてそのリゾート法や観光とか言うようなものが過疎の問題なんかと結びついてしまって、この豊かな自然環境とリゾート法に結びついてよく言われるゴルフ場とかスキー場とかホテルとかいうような三点セット、そういう嵐が日本中を駆けめぐって、うまくバブルに乗って成功したところもありますけれど、９割以上は失敗をしたという、そういう時代背景もあると思います。帯広のまちはお蔭様で北海道では数少ない人口が少しずつ増えている地域なんですが、やはり自然環境も豊かなもんですから、手っとり早くもう少し儲けたいというような、ちょっとここまで言ったら差し障りがありますけれども、やはり三点セットのリゾート開発というようなことが実はありました。しかし、そういうことをくぐったなかで果してそういうような方向だけでいいんだろうかと、我々にとって身の回りの自然環境というのは虎の子ではないのか。その虎の子を無くしてしまうということは、金の卵を産むガチョウを殺してしまったというようなエピソードもございますけれども、そういうことに繋がるというようなことも含めて市民の間からも、自然環境の保全に関する関心というものが非常に高まって、それで環境保全条例へと進んできたわけでございます。具体的には、リゾート法に象徴されるような、いわゆるゴルフ場、スキー場、ホテルというようなことではなくて、もっと違った意味で地域の特質性を生かした、地域の利点を生かしたようなことをやっていこうと、その片方で無制限な自然環境の破壊というものに歯止めをかけていこうという、そういう気運が生じるなかから帯広市の自然環境保全条例というのができあがりました。ただ市町村が作る条

例というものは罰則もございませんし強制力もありませんから、そういう意味では一種の合意形成と精神的な歯止めというような、そういうことになるわけでありますけれども、しかし、この環境問題は責任転嫁・キャッチボールではやはり駄目でして、国がやることはしっかりやってもらう。我々ができることは身近なことから力の弱いかもしれないけれども、しっかりやっていくという、そういう相互関係が成り立っていかなければならないのではないかと私はそんなふうに思います。そのことの帯広市としての意志の現れが自然環境保全条例の制定と、そういうことに繋がろうかと思います。内容的なこととかいろんなことはお手元に資料も届いていると思いますし、時間もありませんので以上お話を申し上げて、たいへん雑駁ですけれども問題提起になったかならないかちょっと分かりませんけども、一番最初の煙草の話しか問題提起になっていないかもしれませんけれども、私の話を終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

司会（先崎）

どうもありがとうございました。続きまして第２分科会のテーマは「ローカルアジェンダ21」でございまして、この問題提起をされる方は自治労環境自治体チームの田中充さんでございます。田中さんよろしくお願いいたします。

田中　充氏・自治労環境自治体作業チーム

田中充

いま私ご紹介いただきました田中充と申します。「自治労」というあまり耳慣れないかもしれませんけれども、自治体職員でつくっている労働組合の中に、自治体の環境問題について取り組もうという作業チームを作っております。その中の一員として、問題提起を仰せつかりましたのでさせていただきますが、私自身は神奈川県の川崎市に勤務しておりまして、環境保全局の所属で仕事を行っております。本日のローカルアジェンダについての問題提起ということですが、ローカルアジェンダというのは横文字でいったい何のことやらさっぱり分からない、ということがおありだろうと思いまして、私の問題提起では、そのローカルアジェンダとはどういう背景から生まれてきたかという点をこの場で御紹介をさせていただいて、具体的な内容については、明日の分科会の中でより深めていきたいと思います。

お手元にいくつかの資料が配られているかと思います。例えば、資料のなかに「環境自治体づくりハンドブック」があります。これは先ほど紹介した自治労と市民運動センターで作ったものでして、この中にローカルアジェンダという言葉が紹介されています。そのローカルアジェンダが、どういう背景から生まれてきたかという点ですが、ちょうど一年前の昨年の６月に、ブラジルのリオデジャネイロで地球サミットが行われました。世界の約180か国の国の政府代表者だとかあるいは各国のＮＧＯ（non-governmental organization＝非政府レベルの民間国際協力組織）ですとか、自治体の関係者だとか様々な人がブラジルのリオに集まって、21世紀に向けた地球の将来をどうするかという論議がおこなわれたわけです。その結論として「リオ宣言」というものがとりまとめられました。これは27の原則と前文からなり、人類が今後合

意して進まなければならない原則がまとめられた宣言です。

この「リオ宣言」をさらに具体的に進めていくために、「アジェンダ21」という行動計画に各国は合意いたしました。もちろん日本政府も合意したわけです。その資料を御紹介させていただきますと、例えば環境自治体づくりハンドブックという資料の16ページとか17ページあたりに出ております。ちょっとご覧になってください。

「アジェンダ21」というのは大変分厚いものだそうでして、私はまだ全部読んではないんですが、話によると40章から成っていて800ページぐらいある厚いものだそうです。アジェンダというのは元々項目とか議題とかいう意味なんですね。アジェンダ21というのは21世紀に向けた項目だということでまとめたものだそうです。これは「リオ宣言」を実現していくための行動計画で、各国が合意したものですから、各国はこのアジェンダというものを作らなければいけない。日本政府はもちろん、今年度「アジェンダ・ジャパン」というものをつくるように作業に取りかかっていると聞いております。「アジェンダ21」というのは、各国がそれぞれの国の、地位の特性を織り込んだ行動計画です。そうしてアジェンダ21の中の大きな話として、実は地域を担う自治体の役割が大変重要であるという話があります。その自治体の役割については、紹介しました環境自治体ハンドブックの25ページ以降に、第28章の地方自治体の役割が載せられております。

アジェンダ21から受けて、ローカルアジェンダと私たちは呼んでいるのですが、その意味するところは、アジェンダ・ジャパンとか国々の行動計画は、地域の自治体政府がイニシアチブをとって地域ごとに行動してはじめて実現する。そのためには自治体がその地域で行動計画を作らなければならない。それがローカルアジェンダであるという訳です。リオ宣言の時に合意されたことは1996年まであと３年のうちに、それぞれの自治体はローカルアジェンダを作ることを合意したわけです。

今日、非常に多くのことが地域のレベルに根ざしています。例えば環境の問題はもちろんです。いま高橋市長から御紹介があった自然の問題や公害の問題、あるいは医療とか貧困とかさまざまな問題が地域レベルに根ざしている。そんなことから自治体のイニシアチブで地域ごとに行動計画を作ろう、これがローカルアジェンダということです。

では、ローカルアジェンダをどう作っていくか、その手続きプログラムが重要です。リオ宣言の中では自治体は市民や地域の団体、ＮＧＯ、あるいは企業等と協議・対話をもって、そうしたプロセスを通じてローカルアジェンダを採択すべきである。ローカルアジェンダはそうした地域の全体の合意として作り、合意されたローカルアジェンダに従って、それぞれの自治体政府は自治体の仕組みとか条例だとか、あるいは行政計画を見直し変えていきなさいとそういうところまで要求している行動計画です。ですから大変重要な上位計画だと思います。しかし、こうしたローカルアジェンダの重要性が今のことろまだ人々には理解されていないように見受けられます。そこで、今回の環境自治体会議でローカルアジェンダを考えていこうという分科会が設定されたと思います。

いずれにしても96年までということですから、あと３年４年あるわけです。しかし、その準備段階は今年のうちから取りかからないと間に合わないと考えています。

それでは、次にローカルアジェンダの骨格をちょっと紹介させていただきます。ローカルアジェンダの考え方をまとめておりますのが、「ロ

ーカルアジェンダをめざして」というパンフレットです。これは最初に須田さんが紹介したＩＣＬＥＩの事務局長のジェブ・ブルックスマンが書いたレポートを抜粋して翻訳したものてす。このレポートをお読みいただけると、大体のところは分かるかと思います。いずれにしても、環境を中心にした町づくり、環境を中心にした教育問題、環境の視点に根ざして自治体の仕組みや計画を考えなければいけないという点が、このローカルアジェンダのポイントだと思いますが、そうしたところは明日の分科会で論議をして深めていきたい。その手掛かりを得るのが明日の分科会の趣旨でもあります。

とはいえ、現段階で大体どのようなことがイメージされているか、もうちょっと分かりやすく紹介したいと思います。「環境自治体ハンドブック」の方に戻りまして、28ページ、29ページにローカルアジェンダのおおよそのプログラム、骨格が出ておりますので、ご覧になっていただきたいと思います。ここに書いてあるのは、リオ会議・地球サミットに先駆けて会議が行われ、クリチバコメットミントという宣言が出されました。これは世界の自治体の代表者や専門家が集まった会議なんですが、その会議の成果としてまとめられたものです。この宣言を受けて地球サミットのアジェンダ21がまとめられた訳です。28ページのコミットメントの１から９までと、29ページに具体的な行動計画として１から13までございます。29ページには、具体的なローカルアジェンダを次のようなかたちで作成しなさいということが書いてあります。

例えば、自治体に存在する企業、団体、専門機関あるいは様々なグループが一堂に会して、ローカルアジェンダづくりの協議の場を持つということで協力体制を確立しなければならないこと。また、それぞれの各分野が、例えば土地利用であったり、交通計画であったり、エネルギー、建設、廃棄物、水、こうした自治体に係るすべての分野の計画が環境に配慮した、環境を考慮した都市計画、都市政策あるいは開発計画を確立しなければならないこと。それから自治体の全部門を対象にした環境監査を定期的に行わなければいけない。等々のそうした項目が書かれております。

実はこうした内容は、どういうところに一番近いかと申しますと、すべての自治体は地方自治法に基づいて基本構想というものを定めることになっております。おそらく読谷村もお持ちだと思いますし、先ほどの帯広市でもお持ちでしょう。私の勤務している川崎市でも川崎市基本構想というのを持っております。いうならばこのローカルアジェンダという位置づけは、そうした基本構想にも匹敵する、つまり環境基本構想ともいうべき自治体の行政の上位のところにあるものと考えられます。例えばそれは自治体の都市計画であったり、交通計画であったり、住宅計画であったり、そうしたハード・ソフト両面にまたがるところで環境というものを見据えていく。そして環境の視点というものを位置づけていく。そういう構想を地域の中で合意して作っていくことがこのローカルアジェンダ21の趣旨であると考えます。これが当面の３年４年の自治体のなかで、一つの大きな課題になっていくだろうと思います。私の考えているイメージをもう少し申し上げますと、環境計画というのは実はいくつかの自治体で試みられております。あるいは環境管理計画というふうに言った方がいいのかもしれません。しかし、ローカルアジェンダと環境管理計画の違いというのは、今までの計画というのは、それは公害であったり自然環境の保全であったり、最近ではアメニティということもよく言われるようになったんですが、いずれにしても個別の環境のプランであるわけです。先ほど申しましたように、ロー

カルアジェンダというのは、むしろ環境総合計画といいますか、都市あるいは地域全体の町づくりとか、地域計画すべてと関わっていないとおかしい。そういう点では都市計画と環境計画が統合したイメージであります。今までどちらかというと環境計画というのは環境分野が作っている計画を言っていたのですが、そうではなくて都市サイドや開発サイドそれから福祉、衛生とか、地域のあらゆる分野が関わって環境のプランを作る、新しいコンセプトの環境プランを作るということが求められている。これがローカルアジェンダではないかと思います。

具体的な内容とか項目についてはまた明日の分科会というなかでより議論を深めていきたいと思います。ぜひ多くの皆さんの参加と討議を期待しております。以上でございます。よろしくお願いいたします。

司会（先崎）

ありがとうございました。分科会の三番目は「環境と平和」でございます。先ほど基調講演にも沖縄の問題いろいろ出されましたけれども、問題提起をされる方は沖縄市議会議員の仲村清勇さんです。よろしくお願いいたします。

仲村清勇

ご紹介いただきました仲村でございます。「環境と平和」というテーマで問題提起を仰せつかったわけでありますが、私はこの読谷村の隣にあります沖縄市に住んでおりまして、基地に関わる環境問題でいささか汗を流しておるということもあって、今日の御指名だというふうに思いますので、いくつかの点について提起をさせていただきたいと思います。

今日は全国からお集まりでございますので、沖縄について確認程度に御理解を願いたい分を申し上げておきたいと思います。沖縄県は日本の最南端・最西端に位置し東西約620マイル南北約520マイルの海域に広がる160の島々から構

仲村清勇氏・沖縄市議会議員

成されています。沖縄から東京へは飛行機で２時間30分。中国へは１時間30分、台湾へは１時間の距離にあり、東南アジア、太平洋諸国にもっとも近い距離に位置しております。また亜熱帯地域に属し、美しい海や空など特有の自然景観、独特の動植物に恵まれた地域でもあります。このような地理的な条件を生かし、沖縄は13世紀には中国や東南アジアとの交易ルートを開き、琉球王朝として一大交易時代を築いています。この王国として600年にわかる長い歴史の中での香り高い文化が創造され、芸能、染め織り、漆器、陶器など国際的にも高く評価をされる芸術品が数多く生み出され、沖縄独特の文化圏を築いてきておるのであります。今この読谷とも大変関わりがありますけれども、ＮＨＫの「琉球の風」という大河ドラマがございます。いま私が申し上げた話の後は、あのテレビに出てまいります。いわゆる徳川幕府との関係、薩摩との関係そして廃藩置県そして第二次世界大戦と、これが沖縄の辿った道であるわけでありますが、1945年４月１日に米軍が沖縄に上陸をします。日本では唯一国内戦を戦った地域であります。近代化学兵器の粋を集めた大量の武器が火器がこの沖縄の地において駆使されたわけであります。結果は最初から分かっておるわけであります。沖縄を守る日本の守備軍は現地から召集をする防衛隊を含めて10万余、しかし沖縄に押し寄せてくる連合軍は48万人。さらに取り巻く米

機動艦隊は1500と。まさに運河の如く押し寄せてきたという経過であります。そして、この読谷村の渡具知の海岸から、北谷の海岸から米軍は上陸をしてまいりますけれども、その上陸の前日３月31日には昼夜分かたず艦砲射撃で上陸のための地を確保するわけであります。こうして一草一木まで打ち砕いてから、もちろんそれは住民を選別しませんから、いわゆる艦砲の雨を降らせて全てを焼き尽くしてから上陸をしてきます。こうして僅か午前８時から一時間足らずで1500名の海兵隊が一人の反撃も受けないで上陸をしたというふうに戦記は語っているわけであります。そして１時間後にはいわゆるこの前にございます読谷補助飛行場と言っておりますけれども、これは昔は北飛行場と言っています。友軍が地域の住民を動員をして日夜兼行で造った飛行場を使わないままに、すぐアメリカが接収されたわけであります。嘉手納の中飛行場も同じであります。１時間後にはそこを制圧をして更に自分たちがその飛行場を次は本土に進攻していくための基地として使う。その整備にかかっているいわゆる余裕のある態勢であります。それから上陸をして実質的には３か月余にわたる攻防戦が展開されますけれども、沖縄戦は６月23日には終結いたします。約３か月間の攻防がありますが、実際に沖縄が降伏調印をしたのは９月７日であります。これはお隣の嘉手納飛行場の中の沖縄市側よりの森根という部落がありまして、そこで９月７日に正式に調印式が行われています。この調印された日を記念して沖縄市は去る３月の定例会議から「平和の日」として定めて平和行政への展開へというふうに位置づけをしておるところであります。この米軍上陸によって沖縄の島の形が変わるほど一草一木まで変わるほど艦砲で爆弾で焼夷弾で焼き尽くされたと。島が変わるほど沖縄この樹木・自然が破壊されたという状況であります。

昔の沖縄の集落というのは、私も小学生でしたけれども、いわゆる砂糖キビを積んで歩く荷馬車あるいはトラックこれがようやくすれ違うことができれば、大きいほうの道路であります。周辺は集落が建ちますから家並みが建ちますけども、垣根は全部木であります。ガジュマルやアコウやフクギや、そういう亜熱帯特有の大きな樹木が屋敷の中にも、もちろん果樹もありますけれども入るわけであります。そしてそれがトンネルを作るぐらいの緑に覆われていた集落があったわけでありますけれども、そういう集落も戦争が終結したときには、その緑は形もなかったというのが沖縄戦における人的な被害も大変であったけれども、そういう自然の破壊、草木の破壊などというのも大変すごいものがあったというふうに私たちはみておるわけであります。先ほどの吉田先生のお話にもありましたけれども、部落が本部である首里に向け、南部に向けて進攻しますけれども、この行軍も先頭はブルトーザーなんですね。ブルドーザーで道を造りながら後から戦車がつきその後ろから兵隊がついていく。こういう状況の戦闘でありますから、邪魔になるやつは全部なぎ倒していく。こうして木も由緒ある建物も、文化的価値有る建物もいっさいがっさい全部瓦礫にしながら、３か月間にわたる戦闘が繰り返された。これがいわゆる沖縄戦の状況であるわけであります。したがって私ども沖縄においてはこの緑に関するかぎりは戦後40何年経っておりますけれども、まだまだ昔の面影を取り戻してないのであります。おそらく、戦前のあの集落のような緑を取り戻すためには、もっともっとあと50年も100年かかるだろうというふうに思う次第であります。県内の各自治体でも最近では緑の問題を大変重要視いたしまして、いかにしてグリーン地帯を作るかということでは、大変行政も努力をしているという現状だと思います。こういうふうに

戦争がいかに環境破壊の元凶であるかということも一例申し上げたかったわけであります。

もう一つ、沖縄における基地の問題でありますが、先ほどもお話がありましたように、地域で言うならば本土の0.6パーセントの広さでありますけれども、沖縄本島全体で言うならば、沖縄県全体では約11パーセント、沖縄本島では20パーセントが基地だという状況でございます。その中に在日米軍施設の75パーセント専用施設が沖縄に配置をされた。この基地の問題でありますけれども、米軍が上陸と同時にニミッツ布告を発して日本政府のいっさいの権限が沖縄には及ばないという政府を確立します。軍政府を。そして布令、布令をどんどん打ち出して、いわゆるニミッツ布告によって、ヘーグ陸戦条約に基づいて日本政府の土地・財産これはアメリカが管理しますと、財産管理をしますということがありますけれども、占領すると同時に日本に向けて基地を建設するわけでありますから、当然この沖縄では個人個人の民間の土地がたくさん含まれております。それを取り上げるために布令でどんどんやって取り上げてきたと。従って布令を出して聞かなければブルトーザーを持ってきて座り込んでいる人たちを排除して、基地をどんどん造ってしまった。これが対日平和条約が発効するまでにはだいたい終わってしまっていたということであるわけであります。

ですから沖縄の基地形成の過程というのは誠に非人道的、人間的には許されない形で取り上げられてきた。それは国のものだけではない、公のものではない。個人個人のものまでそうだったと。反対すればブルトーザーで取り上げた。これが先ほど申し上げるような20パーセントにも占める大きな広大な土地であるということで、この軍用地は今なお基地問題は沖縄にとっては大変重圧であるというのが現状であるわけであります。こうして取り上げたところの土地・基地、この基地に対して復帰と同時にこれは日本政府が復帰特例法の中で追認をして、合法的な形はとっておりますけれども、私ども現地におりましてはこれはあくまでも違法だと。物を言えない状態で軍隊に取り上げられた土地である。それが軍用地であるというふうに認識をいたしておるわけでありまして、しかもそれが市町村の真ん中であれ、肥沃な田んぼであれ、そして港であれ飛行場であれ多くの人たちが使うべき一番いいところだけを選んで取り上げてしまったというふうになっているわけであります。

さて、こうして沖縄におけるアメリカの27年間の支配のなかでもいろいろ出て参りましたけれども、私どもは原点としてはやはり復帰を要求しながらも平和だと、こういう認識を持ちながら運動や働きかけをしてきたわけですが、復帰後も沖縄の現状は変わっていないというのが、一口に言ってこういう状況が続いているということであります。20年経って今も変わっていないというふうに思っております。

さて、そこでたくさんの問題がありますけれども、時間がございませんので急ぎますけれども、今アメリカに提供されている在日米軍基地、この基地から派生をする環境破壊の問題。これが極めて顕著であるわけであります。一つはこの読谷村の北になります恩納村、恩納と連動いたしますけれど恩納・名護・金武・宜野座の４市町村にまたがった素晴らしい恩納岳という山があるわけでありますが、先ほど吉田先生の図面にもありましたけれども、その山が1530万坪余ありますけれども、この山が米軍の演習場として、復帰前からそして今日までずっと使われているわけであります。話は戻りますけれども、アメリカは上陸して一週間後には実は今いうキャンプハンセンという所でありますけれども、そこにすでに制圧をし飛行場を造っておったと、それが今演習場になっておるわけでありますけ

れども、この演習場は飛行機で射撃訓練をする。それから地上からポイントが16か所ありますけれども、そこから目標に向かって山に弾を打ち込んでいく。こういう演習場があるわけであります。周辺に集落がございます。弾が跳弾をして住民地域に飛んだということもあります。あるいは車に飛び込んだということもあります。しかし、それは機関銃程度でありますから、いわゆる定期的に２か月に１回のペースで行われておりますところのこの演習、実弾砲撃演習。これは大体155ミリ砲を使います。榴弾砲。だいたい飛距離が30キロメートル飛ぶ性能であります。ところがこの演習をする距離は３キロから５キロ範囲内です。放物線を描いて飛ぶような火器であります。もちろん化学兵器も使います。これの訓練をやっていますけれども、これが一歩間違えば民間地域に飛び込むという大変危険な状況のなかでずっとやられておりまして、昨年平成４年で、131回の演習で、打ち込まれた弾が6,468発。これがずっと山肌に打ち込まれます。それが火災を起こします。山が殆どもうハゲ山になっております。

この山は申し上げましたように、西海岸と東海岸がつながりますから、ここから流れた赤土は、大変粒子の細かい赤土でありますが、これは二つの海に流れ込んで、定置網に入る魚のエラに入り込んで魚を死滅させる。あるいはまた珊瑚の上にへばりついて珊瑚を窒息させる。いわゆる赤土で海が死んでしまう。こういうことがずっと繰り返されておって、今日も尚そのことが続いていると、こういう状況であるわけであります。ですから、そのことによって山が泣き、見る影もないような山になっておるという状況がございます。

急ぎますが、もう一つは嘉手納の飛行場の問題です。ここで逗子の市長さんもお見えでありますけれども、約907名の原告で嘉手納の爆音裁判を行っています。私もその一人でありますけれども、復帰10年後に飛行場の爆音が復帰前よりもよりひどくなっている。こういうことで裁判を提起したわけであります。原告も単に爆音がひどい地域だけではありません。三市二町一村、沖縄市・具志川市・石川市・読谷村・嘉手納町・北谷町この中から907名の皆さんに出ていただいて裁判闘争をしているわけであります。そして先ほども北谷町のいわゆる医学的なデータで説明がございましたように確実に爆音被害がある。このことを立証いたしておるわけであります。そしてこの広大な地域に、日常普段に爆音が日常生活を破壊する、環境破壊をするそういう爆音がふりまかれているということを私どもは明らかにし、国に対しあるいは県に対しずっと環境基準を守ってくださいと、夜は静かにしてくださいと、こういうことをお願いをしているわけでありますけれども、一向に変わらないし演習は大変激しくなっているというのが現状であります。例えば試みにこの昨年の３月末から４月２日までの６日間、ローリー演習と言っていますけれども、これは現地運用即応体制という演習でありますけれども、この演習期間中に100ホーンを含めて70ホーン以上が462回、累計の時間にいたしますと１日に5.2時間という非常にひどい騒音を出しているという現況もあるわけであります。これが日常ふんだんにどんどん激化をしているという状況でありまして、やはり嘉手納の基地そして米軍が演習をする、そのことによって地域住民の生活が破壊されている。環境が破壊をされている。こういうふうに現実に起こっているわけであります。これは嘉手納だけではありません。普天間においてもその通りでありますし、この読谷補助飛行場においても定期的な演習が繰り返されております。米軍は演習をするのは当たり前である。こういうことでやっておりますが、日米安保条約、地

位協定で取り決められている沖縄の基地についても、本土とは差別があります。例えば本土の在日米軍基地では曲技飛行、アクロバット飛行、デモ飛行はできないように日米合同委員会で協定をされているわけでありますが、沖縄ではやってよろしいということになっています。沖縄の基地は自由ですと。しかも沖縄では水源地、県民が飲むダムの上でも演習ができる。こういうふうな形になっているわけでありまして、沖縄における在日米軍基地は私どもに大きな環境破壊を押しつけていると、こういうふうに考えておるところであります。従いまして私ども反基地闘争というとお上にたてつくということで、国のために基地は必要だとこういうふうに仰っておられますけれども、しかし、この基地が私たち国民、ここに住んでいる多くの人間の日常的な生活を具体的に侵害をしている。環境も破壊をしている。こういう事実を申し上げて、問題提起にさせていただきます。ありがとうございました。

司会（先崎）

今回この沖縄読谷村で第２回環境自治体会議をなぜ開いたのかということが、極めて鮮明になる問題提起だったと思います。以上で御三名からの問題提起が終わりました。これで、全体集会第一日目は終わりでございまして、このあと６時から歓迎会が予定されておりまが、日程に一部変更がございますので、事務局から御説明を申し上げます。ありがとうございました。

事務局

はい、それでは御登壇いただきました三名の皆さま御降壇いただきたいと思います。大変ありがとうございました。これから日程について若干ご説明をいたしますが、私今回環境自治体会議事務局を受け承りました読谷村役場の企画課の小橋川と申します。どうぞよろしくお願いをしたいと思います。

第２回環境自治体会議事務局・小橋川清弘

まず６ページと７ページの方をご覧いただきたいと思います。プログラム冊子の６ページと７ページに会議スケジュールがございますが、今日これから時間は若干繰り越してしまいましたが、終わりまして全国からの参加の皆さま方、貸切りバス、大型バス２台でホテルの方へ移動いたします。ホテルの方でチェックインをしていただきまして、６時からということでございましたが、６時30分ということで30分繰り下げさせていただきます。会場も実は、村営の残波岬いこいの広場の屋外バーベキュー場ということを予定しておりましたが、残念ながらこの降雨のためにレストランと建物の内部を活用いたしまして交流会を行います。ただし本日の交流会は県外からの参加者を対象としております。村内の皆さま方の御参加は明日の座喜味城跡、雨天の場合はこの会場になりますが、明日は琉球舞踊も含めました交流会を座喜味城跡公園の中で予定をしております。そこへは村民の皆さま方の御参加もいただける、そういう日程でございますのでどうぞよろしくお願いいたします。そしてホテルからは実は徒歩で、すぐ隣に村営の残波岬いこいの広場がありますから、徒歩で行っていただくようにしておりましたが、この雨でございますので、マイクロバスでホテルからいこいの広場まで、歩いても５分から７分ぐらい程なんでございますが、マイクロバスでピストン運行させていただきますので、時間は６

時15分から25分をめどにバスピストン運行いたしますので、どうぞよろしくお願いをいたします。なお名札の着用を是非ともお願いをいたします。この名札の着用によって、この会の参加者であるということの確認をさせていただきますので、どうぞ名札、本日の交流会の参加の皆さんよろしくお願いをいたします。

それから明日でございますが、分科会の打ち合わせ会議を、この分科会に先立ちまして行います。分科会の司会者団それからパネラー、提言者の皆さん方は８時30分から、この会場で打ち合わせ会議がございますので、早朝でございますが御参加いただきたいと思います。なおホテルからは８時15分にホテルのマイクロバスがここへ出ます。よろしくお願いいたします。一般の参加者の皆さん方はホテルから９時15分に貸切りバスが大型バスが出ますので、それにお乗りいただきましてこの会場にお越しをいただきたいと思います。

それから分科会の会場でございますが、一部訂正の正誤表も入れましたけれども、この６ページ７ページにあります会場が正しい会場でございます。要するに第一分科会がこの会場、中間から二つに割りますけれども、ステージに近いほうが第一分科会になります。そして写真展に近いほうが第三分科会になりまして、第二分科会「ローカルアジェンダ21」は参加希望者が多数ございましたので、お隣の体育センターのほうに場所を移させていただきました。どうぞ御了解をお願いしたいと思います。

それからお昼はここで弁当を準備してございますので、それをお食べいただきまして、午後１時半から３時まで同じく分科会の連続でございます。

それから読谷ウォッチングは午後３時から出発をいたしますので、読谷ウォッチング参加の皆さん方マイクロバスを準備してございます。それで行います。そして最後が座喜味城跡公園で交流会という予定でございますが、繰り返します。雨天の場合は座喜味城跡公園ではできませんのでこの会場になります。明日12時頃その判断をしたいと思います。土曜日29日は同じく９時15分頃ホテルから貸切りバスでここにバスが出ます。全体集会を行いまして、分科会報告、読谷宣言で終了という日程でございますが、この後、前もって参加申し込みをいただきました皆さん方はオプションも予定通り今のところやるつもりであります。ただし天候が悪い状態ですと中止ということもあるとのことですので、ご了承いただきたいと思います。

これで初日の全体集会を閉じさせていただきます。ありがとうございました。

１日目　全体集会終了後の「交流会」（残波岬いこいの広場）

昨年の北海道池田町に続く全国でも第２回目の環境自治体会議、参加者同士の交流は今後のネットワークづくりに欠かせないもの。計画では、屋外の大きなバーベキュー場ですがすがしい海風と夜空の星を眺めながらと考えていたのですが、残念ながら大雨の降るなか、レストランや和室、ロビーをすべて開放してのパーティーになってしまいました。でも、参加者の熱気溢れる交流が思い思いに展開され楽しい一時となりました。

若手の役場職員が臨時のコックになり、バーベキューを。

お肉の焼き上がりを待つ参加者。

焼けたお肉や野菜をそれぞれセルフサービス

役場全部課長が接待にあたりました。（泡盛コーナーにて）

和室では女性だけの「分科会」が……。

レストラン内部での交流風景（その1）

レストラン内部での交流風景（その2）

レストラン内部での交流風景（その3）

挨拶する須田春海氏。

レストラン内部での交流風景（その4）

レストラン内部での交流風景（その5）

レストラン内部での交流風景（その6）